

陸 賈「新 語」の 研 究

宮 崎 市 定

一 新語の研究法

陸賈は史記卷九七、及び漢書卷四三に傳があり、秦末漢初の人である。彼が漢の高祖のために、「新語」を著した経緯については史記に

陸生時時に「高祖の」前にすすんで、詩書を説稱す。高帝、これを罵って曰く、迺公は馬上に居りて之を得たり。安んぞ詩書を事とせん。陸生曰く、馬上に居りて之を得るも、寧んぞ馬上を以て之を治むべけんや。且つ湯武は逆に取りて、順を以て之を守り、文武並びに用う。こは長久の術なり。昔は呉王夫差と智伯とは、武を極めて亡び、秦は刑法に任じて變ぜず、遂に趙氏（＝秦）を滅したり。さきに秦をして已に天下を并せしうえは、仁義を行い先聖に法らしめば、陛下安んぞ得てこれを有せんや、と。高帝、憚らずして慙ずる色あり。迺ち陸生に謂いて曰く、試みに我が爲に、秦が天下を失いし所以、吾がこれを得し所以は何ぞ、より古の成敗の國に及ぶまでを著せ、と。陸生迺ち存亡の徴を粗述し、凡そ十二篇を著わす。一篇を奏する毎に、高帝未だ嘗て善と稱せずんばあらず。左右、萬歳を呼ぶ。その書を號して「新語」という。

とあり、漢書も殆んど同文である。

然るに同じ漢書卷三〇、藝文志儒家の條には、

陸賈二十三篇（四庫全書提要に引用して二十七篇というは何故か分らない）

とあり、先にいった十二篇と、篇數に相違がある。併し漢書陸賈傳の顏師古注には、

其の書、今見に存す。

と、何の疑いもなく言っているから、陸賈新語十二篇は、少くも唐代にはそのまま傳わっていたのであろう。

然るに宋代になって王應麟が、玉海卷五五、藝文著書の條で、新語二卷をあげ、

今、世に存する者は、道基・術事・輔政・無爲・資賢・至德・懷慮、纔かに七篇のみ。

といっているので、それならば、現今ちゃんと存在している、辨惑・慎微（上卷）、本行・明誠・思務（下卷）の五篇はどこから来たかという問題が起る。

現今の「新語」は上下二卷、十二篇から成っている。尤も古い刊本は明の弘治本であり、これは現今、四部叢刊に復刻されている。別に萬曆年間の叢書「子彙」所収本、范氏天一閣刊本、「漢魏叢書」所収本などがある。天一閣本は萬曆辛卯（一九九年）范大沖の序があり、日本に傳わって、數種の訓點本が印行された。以上は相互の間に多少の異同があつても、それは大した差異でなく、同一系統中の異本であるに過ぎない。

これらの明刊本は、何れも文中に脱落があり、その部分に、「缺何字」と注するのが特長である。缺字の箇所と數とは必ずしも同一でなく、刊本によって異同があるが、缺字の數の少ないものが善本だとは斷言しかねるという。とまれ本書のように、至る所に、缺何字と注する書物は、中國に於ける夥しい古典の中でも、蓋し稀有の例に屬するといえる。

日本に伝えられた唐初、魏徵等撰するところの「群書治要」卷四十に、「新語」十八條を収める。これを現今の通行本の相當個處と比較すると、本文において可なり大幅な異同が認められ、通行本に注する缺字がない。但し本文の異同において、多くの場合は治要本が正しいと思われるが、時には通行本の方が反って適當だと認められる部分もある。

「新語」通行本の誤脱は、單に缺字を注する箇處のみに止まらない。何となれば、道基篇第一は、缺一字、と注する

こと五箇處に止まるが、恐らく全書中、最も讀みにくい篇であり、それは無數と云つていいほどの誤字、脱落、錯簡がある爲と思われる。不幸にしてこの篇から、群書治要に引用したものは、一條もないので比較検討することができぬ。

中國では清末以後、考證學の對象とするところは、經學のみならず諸子百家に及び、陸賈の新語も、屢々研究對象に取上げられた。孫詒讓に「新語校」(札迻七)があり、俞樾の讀書餘錄(又は諸子平議補錄)に、「讀新語」の校訂を含んでいる。併し最も有益なのは、宋翔鳳の「浮溪精舍叢書」中の「新語」と、「龍溪精舍叢書」中の唐晏「新語校注」とである。

前者は咸豐三年三月五日、宋翔鳳の自序あり、更にそれに先立つ道光七年の自記によれば、「漢魏叢書」本を底本とし、「子彙」本、明弘治間姜思復本、舊影抄明胡維新本(萬曆年間序)、及び來歴不明の別本、「群書治要」本などを用いて校訂したのだという。

唐晏の「校注」は、新語の佚文を、易林、太平御覽などの引用文と比較し、また孫詒讓、俞樾の研究を用い、特に「子彙」本によって通行本の誤脱を訂補する所が多い。ただ「群書治要」を利用するに及ばなかったことは、この書の價值を減ずるを免れない。

私は先頃、「東方學」第二五輯(昭和三八年三月)に、「陸賈新語道基篇の研究」と題する小論を掲げ、道基篇だけの本文について、四十箇所の訂正を試みた。實はこれは京都大學における私の演習に「新語」をテキストとして用い、學生といつしよに、テキスト・クリティクを試みた結果を發表したものである。この發表後、楊聯陞教授はじめ、諸方から色々有益な助言批評を頂いたが、今度は「新語」全卷に亘つて校訂してみようと思ひ立つたのである。

「新語」は通行本と、群書治要本とを比較すると、兩者の本文に相當な差違がある。意味の上ではそれほど違いがないが、文章に現われた形の上を見ると、非常に違つた多くの出入が存在するのである。このことは一つの事實を暗示する。即ち兩者は結局は同一の根源から出たには相違ないが、この根源になった書からして、既に多くの誤脱を含み、それ

を各人が各様に補修して別々の定本を造ったのではないか、という想像である。果してこのような想像が當っておれば、むかし「新語」の原本があったとして、これを復原することは、別に新資料でも現われぬ限り、それは全く不可能なことだ、という結論になる。

するとこれからの「新語」研究の方向は、現存の新語によつて、いかにすれば最も間違いを少くして、その思想を汲みとるか、という方へ向けなければならない。そのためには、本文の缺けたところ、誤っていると思われるところを、兎も角も一應の處置として、之を補い、之を訂してみることである。私の先の「陸賈新語道基篇の研究」は實にこの線に沿ったものに外ならない。

こういう際にいつも抵抗が生ずるのは、古典に對する「臆改」、特にそれが誤った場合における「淺人妄改」の譏りである。特にこれは尚古の國たる中國において甚しいようである。宋翔鳳はその自記の中で、「漢魏叢書」本について、中間闕字は他本より多くして、文は訛錯少し、尚お臆改無ければなり。

といっているが、このようなことを言われると、大ていの學者は、意氣沮喪して、臆改をあきらめてしまふものらしい。ところが私の態度は、大いにこの「臆改」をやってみようというのである。書物の少なかった時代、一冊の本があれば、ただそれだけに頼っていた時代には、臆改本が流行すると、時には贋が眞を亂ることになって、或いは迷惑な事態が生じたかもしれない。併し現今は印刷も普及し、一寸した研究室でも、「新語」の異版數種は具えている時世であるから、臆改本は臆改本として別に利用すれば、特に支障は起らない筈である。

私がテキストの臆改を敢て主張するには、此で更めて言っておかなければならぬ理由がある。前に述べた龍溪精舎本、及び浮溪精舎本は共に明の萬曆四年刻板の「子彙」本を校訂の材料に用いて居り、特に龍溪本はこれを珍重するが、抑もこの子彙本なるものの性質が明かでない。浮溪本は、子彙本をあまり信用せず、その通行本と字を異にする所は、臆改で

はないかと疑っている。これは浮溪本の校訂者宋氏が既に「群書治要」を知っているので、兩者を比較した時に、子彙本のアラが暴露するのである。例えば「思務第十二」において、通行本で、

遠於義者。不可動以_(缺一字)。

とある所が、子彙本では、

遠於義者。不可動以義。

となっていて、通行本の缺字がちゃんと埋っているのである。然るに、群書治要本は、

遠於義者。不可動以利。

とあり、最後の字が利となっている。するとこれでは意味が通りにくいから、日本の校訂者が欄外に、

遠當作達。

と注意している。そこでこの説に従えば本文は、

達於義者。不可動以利。

義に達する者は、動かすに利を以てすべからず。

となって、意味が一目瞭然疏通する。これは最下の一字が利であることが分っていた當然の歸結として、前の遠を達に改めようとしたのである。然るに子彙本は、最初の字の遠だけしか見ることができなかったで、それが誤っていることに氣付かず、それを正しいものとして、最下の一字を臆測によって補ったから、つい「義」という字を入れてしまったのである。子彙本の臆改については、既に嚴可均もこれに氣付いていたらしく、浮溪本の「明誠第十一」に、治要本をとり、通行本に缺けた三字を填した箇所、

惡行著乎己。無近而不去也。

の條下の注に、

子彙作惡行著於身。無遠而不去。嚴可均曰。子彙此類。多以意補。

といっている。

これは幸いにして「群書治要」本を参照することができたから、子彙本の作爲が暴露したのであるが、もしそういう好條件がなかったならば、宋氏と雖も亦、龍溪本の校訂者唐氏のように、子彙本をひたすら珍重しなかつたとは保證できない。そして既に子彙本が斯くの如くであつたとすれば、宋氏が利用した別本なるものの素性も亦甚だ疑わしいといわねばならぬ。

宋氏は専ら「群書治要」により、異同ある時は概ね「群書治要」本によって改めているが、併し兩者を讀み合わせると、必ずしも常に治要本が正しいともいえないようである。例えば「本行第十」中の一節を比較すると、

(通行本) 璧玉珠璣。不御於上。則翫好之物。弃於下。雕刻綉畫。不納於君。則淫伎曲巧。絶於民。

(治要本) 璧玉珠璣。不御於上。則玩好之物。弃於下。雕琢刻畫之類。不納於君。則淫伎曲巧。絶於下。

とあり、細部は暫く措いて問わぬとし、治要本にのみある「之類」の二字は明かに衍文であり、また最後の「下」は明かに「民」字の誤りとしなければならぬ。浮溪本は治要本を過信するのあまり、悉く治要本を採って通行本を改めた態度は理解し難い。

要するに中國の古典は、傳世の間に、無數の錯誤と臆改とを重ねて現今に至つたものである。それでなければ同じ新語で、通行本と治要との間に、あれ程の異同の生ずる筈がない。良否の問題は要するに相對的、比較的なものであり、誤謬と臆改は兩者に共通して免れなかつた所であると思われる。ただそれが何時とも知れず、何人によつても知れずに爲された時には、學者はひたすら盲從して些かの疑惑を挾まず、恰もそれが千古の眞を傳えたが如くに寶貴するのは笑うべ

きの極だと言わざるを得ない。これ古典學者にありがちな通弊である。故に私はむしろ堂々と、その箇處を示し、責任を以て臆改を試みる新風を創り出したいと考えるのである。

臆改の方法には色々あるが、要するに文体と意味との、兩方面から可能性を狭めて行つて、蓋然性に進み、最後には少くとも、當らずと雖も遠からず、という、或程度の必然性に到達して、その範圍内において誤字を正し、脱落を補つて行くことができると思ふ。いま一例をあげると、懷慮第九に、

(A) 天一以大成數人一以(字缺二)成倫

という句がある。これは文体をみると、明かに對句であるから、この缺字は相當高い妥當性を以て補う可能性がありそうである。但し缺字を補う前に氣がかりなのは「天一」と「人一」とが對になっていることである。これは易、繫辭上に「天一地二」という言葉があるように、この場合は地と人とが違ふだけで、やはり「人二」にしなければならぬ。そこで

(B) 天一以大成數

人二以〇成倫

という對が得られる。するとこの缺字は、疑いもなく「仁」字でなければならぬ。そこで

(C) 天一以大成數 天は一、大を以て數をなす

人二以仁成倫 人は二、仁を以て倫をなす

という對ができる。ところが前句、「大を以て數をなす」は意味が不明瞭である。もし一と大とを置きかえ、後句もこれに準ずると、

(D) 天大以一成數 天は大なり、一を以て數をなす

人仁以二成倫 人は仁なり、二を以て倫をなす

となつて、この方が理に叶ってくる。そして「天大」という言葉は、老子の中に「天大地大」云云の言葉があるから、立派な成語に熟しているのである。ところでこの句は、天という字の成立を説明しているのであつて、例えば「説文」に、

天は顛なり。至高にして上なし。一と大とに从う。

とあるのと同じ意味である。然らば次の句は同じく「説文」に「仁」字を解して

人に从い二に从う。

とあると同巧異曲、さすれば後句を改めて、

(E) 天大以一成數 天は大なり、一を以て數を成す

仁人以二成倫 仁は人なり、二を以て倫となす

としたい所である。併しこうすると、天が仁に對し、大が人に對するようになってしまい、全体の論理の上に無理が生ずる。又あまりに文字に拘泥しては、説文の亞流になり下ってしまふ。そこで私の「新語」本文の校訂は、(D)の段階に止めておくのである。

このようにして捏ねあげた臆改本の全文を次に掲げる。先に私が道基篇だけの試作を發表した時には、改めた箇所につき、一々理由をあげて説明したが、僅か一篇について改めた所四十條に上っている。これを全書について實施するのはその煩にたえないから、此度は特別な場合を除く外、理由を附けない。前の發表の後、幸いにして諸賢の教示を得て、考え直した所も少くない。その結果、或いは先に學生の讀み方を退けて、反つて後にその説に従つた所もある。

字を「」で圍んだのは、原文を衍として削つたしるし、傍に二重丸を附したのは、當に有るべき文字として添加したる記號、傍に黒圓を附したのは、もと缺何字とあつた所へ、新たに文字を填したもの。特に最後の場合、浮溪本、龍溪本、讀書餘錄などに據つた所が多いが、これも一々注記する煩を省いた。

二 新語本文の考訂と翻譯

道基第一

傳曰。天生萬物。以地養之。聖人成之。功德參合。而道術生焉。故〔日〕天張日月。列星辰。序四時。調陰陽。布氣治性。次置五行。春生夏長。秋收冬藏。陽生雷電。陰成雪霜。養育群生。一茂一亡。潤之以風雨。曝之以日光。溫之以節氣。降之以殞霜。位之以衆星。制之以斗衡。苞之以六合。羅之以紀綱。改之以災變。告之以禎祥。動之以生殺。悟之以文章。〔故在天者可見在地者可量在物者可紀在人者可相〕故地封五嶽。畫四瀆。規滂澤。通水泉。樹物養類。〔苞〕以殖萬根。〔暴〕糞形養精。以立群生。不違天時。不奪物性。不藏其情。不匿其詐。故〔知天者仰觀天文知地者俯察地理〕在天者可見。在地者可量。在

傳に曰く、天は萬物を生じ、地を以て之を養い、聖人を以て之を成さしむ。功德參合し、道術これより生ず、と。故に天は日月を張り、星辰を列し、四時を序いで、陰陽を調し、氣を布き性を治む。五行を次置し、春生じ夏長じ、秋收め冬藏す。陽は雷電を生じ、陰は雪霜を成し、群生を養育し、一茂一亡す。之を潤すに風雨を以てし、之を曝すに日光を以てし、之を温むるに節氣を以てし、之に降すに殞霜を以てし、之を位するに衆星を以てし、之を制するに斗衡を以てし、之を苞むに六合を以てし、之を羅ぬるに紀綱を以てし、之を改むるに災變を以てし、之に告ぐるに禎祥を以てし、之を動かすに生殺を以てし、之を悟らすに文章を以てす。故に地は五嶽を封じ、四瀆を畫し、滂澤を規し、水泉を通じ、物を樹て類を養い、以て萬根を殖やし、形に糞い精を養い、以て群生を立つ。天時に違わず、物性を奪わず、其情を藏さず、その詐を匿さず、故に天に在る者は見るべく、地に在る者は量るべく、物に在る者は紀すべく、人にある者は相すべし。跂行し喘息し、融飛し蠕動するの類、水に生じ陸に行き、根著き葉長ずるの屬も、爲

物者可紀。在人者可相。跛行喘息蜎飛蠕動之類。水生陸行根著葉長之屬。爲寧其心。而安其性。蓋天地相承。氣感相應而成者也。

於是先聖包犧。〔乃〕仰觀天文。俯察地理。圖畫乾坤。以定人道。民始開悟。知有父子之親。君臣之義。夫婦之〔道〕別。長幼之序。〔於是〕百官是立。王道乃生。民人食肉飲血。被衣皮毛。至於神農。以爲行蟲走獸。難以養民。乃求可食之物。嘗百草之實。察酸苦之味。教民食五穀。天下人民。野居穴處。未有室屋。則與禽獸同域。於是黃帝。乃伐木構材。築作宮室。上棟下宇。以避風雨。民知室居食穀。而未知功力。於是后稷。乃列封疆。畫畔界。以分〔土〕地之所宜。闢田土殖百穀。以〔用〕養蒼民。種桑麻。致絲枲。以蔽形體。當斯之時。四瀆未通。洪水爲害。禹乃決江疏河。通之四瀆。致之於海。大小相引。

に其心に寧んじて其性に安んず。蓋し天地相承け、氣感相應じて成す者なり。

是において先聖包犧、仰いで天文を觀、俯して地理を察し、乾坤を圖畫し以て人道を定む。民始めて開悟し、父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序あるを知る。百官是に立ち、王道乃ち生ず。民人、肉を食い血を飲み、皮を衣、毛を被る。神農に至りては以爲らく、行蟲走獸は以て民を養い難しと。乃ち食うべきの物を求め、百草の實を嘗め、酸苦の味を察し、民に五穀を食うを教う。天下の人民、野居し穴處す。未だ室屋あらざれば、禽獸と域を同じくす。是において黃帝、乃ち木を伐り材を構え、宮室を築作し、棟を上にし宇を下にし、以て風雨を避く。民、室居食穀するを知りて、未だ功力を知らず。是において后稷、乃ち封疆を列し、畔界を畫り、以て地の宜しき所を分つ。田土を闢き百穀を殖え、以て蒼民を養い、桑麻を種え絲枲を致し、以て形體を蔽う。斯の時に當り、四瀆未だ通ぜず、洪水害をなす。禹乃ち江を決し河を疏し、之を四瀆に通じ、之を海に致し、大小相引き、高小相受け、百川順流して各々其の所に歸す。然る後、人民高險を去り、平土に處るを得たり。川谷交錯し、風化未だ通ぜず、九州絶隔し、未だ舟車の用の以て深きを濟し遠きを致すあらず。是

高下相受。百川順流。各歸其所。然後人民。得去高險。處平土。川谷交錯。風化未通。九州絕隔。未有舟車之用。以濟深致遠。於是奚仲。乃橈曲爲輪。因直爲轅。駕馬服牛。浮舟杖楫。以代人力。鑠金鏤木。分「苞」瓠燒殖。以備器械。於是民知輕重。好利惡難。避勞就逸。於是皐陶。乃立獄制罪。懸賞設罰。異是非。明好惡。檢奸邪。消佚亂。民知畏法。而無禮義。

於是中聖。乃設辟雍庠序之教。以正上下之儀。明父子之禮。君臣之義。使強不凌弱。衆不暴寡。棄貪鄙之心。興清潔之行。禮義獨行。綱紀「不」立。後世衰廢。

於是後聖。乃定五經。明六藝。承天統地。窮事察微。原情立本。「以緒」攷諸人倫。宗諸天地。以脩篇章。垂諸來世。被諸鳥獸。以匡衰亂。天人合策。「原」德道悉備。智者達其心。百工窮其

において奚仲、乃ち曲を焼めて輪となし、直に因りて轅となし、馬を駕し牛を服し、舟を浮ばせ楫に仗り、以て人力に代え、金を鑠かし木を鏤り、瓠を分ち埴を焼き、以て器械に備う。是において民輕重を知り、利を好み難を惡み、勞を避け逸に就く。是において皐陶乃ち獄を立て罪を制し、賞を懸け罰を設け、是非を異にし好惡を明かにし、奸邪を検し佚亂を消す。民法を畏るるを知りて而も禮義なし。

是において中聖、乃ち辟雍庠序の教を設け、以て上下の儀を正し、父子の禮、君臣の義を明かにす。強をして弱を凌がず、衆をして寡を暴せず、貪鄙の心を弃て、清潔の行を興さしむ。禮義獨り行われ、綱紀不いに立ちしも、後世衰廢せり。

是において後聖、乃ち五經を定め、六藝を明かにし、天を承け地を統べ、事を窮め微を察し、情を原ね本を立て、これを人倫に攷え、これを天地に宗つき、以て篇章を脩め、これを來世に垂れ、これを鳥獸に被らせ、以て衰亂を匡す。天人策を合し、德道悉く備われり。智者は其の心を

巧。「乃調之以管絃絲竹之音設鍾鼓歌舞之樂以節奢侈正風俗通文雅」後世淫邪。增之以鄭衛之音。民弃本趨末。伎巧橫出。用意各殊。則加雕文刻鏤。傳致膠漆。丹青玄黃琦瑋之色。以窮耳目之好。極工匠之巧。乃調之以管絃絲竹之音。設鍾鼓歌舞之樂。以節奢侈。正風俗。通文雅。夫「驢騾馳」璫瑤玫瑰。犀象瑋瑁。琥珀珊瑚。翠羽珠玉。山生水藏。擇地而居。潔清明朗。潤澤「而」滋濡。磨而不磷。涅而不淄。天氣所生。神靈所治。幽間清淨。與神浮沈。莫「之」不効力爲用。盡情爲器。故曰聖人成之。所以能統物通變。治情性顯仁義也。

夫「人」仁者寬博浩大。恢廓密微。義者附遠寧近。懷來萬邦。故聖人懷仁仗義。分明纖微。忖度天地。危而不傾。佚而不亂者。仁義之所治也。行之於親近。而疏遠悅。脩之於閨門之內。

達し、百工はその巧を窮む。後世淫邪にして、之に増すに鄭衛の音を以てし、民本を弃て末に趨り、伎巧横出し、用意各々殊なり。則ち雕文刻鏤を加え、膠漆丹青・玄黃琦瑋の色を傳致し、以て耳目の好を窮め、工匠の巧を極む。乃ち之を調するに管絃絲竹の音を以てし、鍾鼓歌舞の樂を設け、以て奢侈を節し、風俗を正し、文雅を通ず。夫れ璫瑤玫瑰・犀象瑋瑁・琥珀珊瑚・翠羽珠玉は、山生じ水藏し、地を擇んで居り、潔清にして明朗、潤澤にして滋濡、磨して磷らず、涅めて淄まず、天氣の生ずる所、神靈の治むる所、幽間清淨にして神と浮沈す。力を効して用を爲し、情を盡して器と爲らざるはなし。故に曰く、聖人之を成すと。能く物を統べ變を通じ、情性を治め、仁義を顯わす所なり。

夫れ仁者は寬博にして浩大、恢廓にして密微、義者は遠きを附け、近きを寧んじ、萬邦を懷き來らしむ。故に聖人は仁を懷き義に仗り、纖微を分明し、天地を忖度す。危くして傾かず、佚して亂れざる者は仁義の治むる所なればなり。之を親近に行いて疏遠なるもの悦び、之を閨門の内に脩めて、名譽外に馳す。故に仁は隠れて著われざることな

而名譽馳於外。故仁無隱而不著。義無幽而不彰。昔者虞舜。蒸蒸於父母。光輝耀於天地。伯夷叔齊。餓於首陽。功美垂於萬代。太公自布衣。昇三公之位。累世享千乘之爵。知伯仗威任力。兼三晉而亡。是以君子。握道而治。據德而行。席仁而坐。杖義而〔彊〕息。虛無寂寞。通動無量。故制事因短而〔動〕益長。以〔圓〕規制〔規〕圓。以矩立方。聖人〔王〕匡世。賢者建功。湯舉伊尹。周任呂望。行合天地。德配陰陽。承天誅惡。尅暴除殃。將氣養物。持明設光。耳聽八極。目覩四方。忠進讒退。直立邪亡。道行姦止。不得兩成。張綱本理。杜漸消萌。

夫謀事不並仁義者。後必敗。殖不固本。而立高基者。後必崩。故聖人防亂以經藝。工匠正曲以準繩。德盛者威廣。力盛者驕衆。齊桓公尙德以霸。秦二世尙刑而亡。故虐行則怨積。德布則功

く、義は幽にして彰われざることなし。昔は虞舜、父母に蒸々たり、光輝天地に耀く。伯夷叔齊は首陽に餓え、功美萬代に垂る。太公は布衣より三公の位に昇り、累世千乗の爵を享け、知伯は威に仗り力に任じ、三晉を兼ねて亡びたり。是を以て君子は道を握りて治め、徳に據りて行い、仁に席して坐し、義に仗りて息う。虚無寂寞にして、通動すること無量なり。故に事を制するに、短に因りて益々長じ、規を以て圓を制し、矩を以て方を立つ。聖人は世を匡し、賢者は功を建つ。湯は伊尹を擧げ、周は呂望に任ず。行い天地に合し、徳は陰陽に配す。天を承け惡を誅し、暴に尅ち殃を除く。氣を將え物を養い、明を持し光を設く。耳は八極を聞き、目は四方を覩る。忠進みて讒退き、直立ちて邪亡び、道行われて姦止み、兩つながら成すを得ず。綱を張り理に本つき、漸を杜ざし萌を消すなり。

夫れ事を謀りて仁義と並ばざる者は後必ず敗れ、殖うるに本を固めずして高基を立つるものは後必ず崩る。故に聖人は亂を防ぐに經藝を以てし、工匠は曲を正すに準繩を以てす。徳の盛んなる者は威廣く、力盛んなる者は驕り衆し。齊の桓公は徳を尙びて以て霸たり、秦の二世は刑を尙

興。百姓以德附。骨肉以仁親。夫婦以義合。朋友以〔義〕德信。君臣以〔義〕仁序。百官以義承。曾閔以仁成大孝。伯姬以義建至貞。守國者以仁堅固。佐君者以義不傾。君以仁治。臣以義平。鄉黨以仁恂恂。朝廷以義便便。貞〔美〕女以〔貞〕仁顯其行。烈士以義彰其名。陽氣以仁生。陰節以義降。鹿鳴以仁求其群。關雎以義鳴其雄。春秋以仁義貶絕。詩以仁義存亡。乾坤以仁和合。八卦以義相承。書以仁敍九族。〔君臣〕典以義制〔忠〕君臣。樂〔禮〕以仁盡節。禮〔樂〕以義〔禮〕升降。仁者道之紀。義者聖之學。得〔學〕之者明。失之者昏。順之者存。背之者亡。陳力就列。以仁彰名。以義建功。師旅行陣。懷〔德〕仁爲固。仗義而彊。調氣養性。仁者壽長。育〔美〕才〔次〕涵德。義者行方。君子以義相褒。小人以利相欺。愚者以力相亂。賢者以義相治。穀梁傳

んで亡びたり。故に虐行わるれば怨み積み、徳布けば功興る。百姓は徳を以て附し、骨肉は仁を以て親しみ、夫婦は義を以て合す。朋友は徳を以て信じ、君臣は仁を以て序し、百官は義を以て承く。曾・閔は仁を以て大孝を成し、伯姬は義を以て至貞を建つ。國を守る者は仁を以て堅固に、君を佐くる者は義を以て傾かず、君は仁を以て治め、臣は義を以て平らぐ。郷黨は仁を以て恂々たり、朝廷は義を以て便々たり。貞女は仁を以て其の行を顯わし、烈士は義を以て其の名を彰かにす。陽氣は仁を以て生じ、陰節は義を以て降る。鹿鳴は仁を以て其の群を求め、關雎は義を以て其の雄に鳴く。春秋は仁義を以て貶絶し、詩は仁義を以て存亡し、乾坤は仁を以て和合し、八卦は義を以て相承け、書は仁を以て九族を叙し、典は義を以て君臣を制し、樂は仁を以て節を盡し、禮は義を以て升降す。仁なる者は道の紀にして、義なる者は聖の學なり。之を得る者は明かにして、之を失う者は昏く、之に順う者は存し、之に背く者は亡ぶ。力を陳べ列に就くに、仁を以て名を彰わし、義を以て功を建つ。師旅行陣には、仁を懷いて固めをなし、義に攸りて彊し。氣を調し性を養って、仁者は壽長く、才を育し徳を涵^タわえ、義者は行い方し。君子は義を以て相褒し、小人は利を以て相欺く。愚者は力を以て相亂り、賢者は義を以て相治む。穀梁傳に曰く仁者は和を以て親しみ、義者は禮を以て尊しと。萬世亂れざるは仁義の治

曰。仁者以「治」和親。義者以「利」禮尊。萬世不亂。仁義之所治也。

術事第二

善言古者。合之於今。能術遠者。考之於近。故說事者。上陳五帝之功。而思之于身。下列桀紂之敗。而戒之于己。「則」聖人德可以配日月。行可以合神靈。登高及遠。達幽洞冥。聽之無聲。視之無形。「世人」莫不覩其兆。莫不知其情。校脩五經之本末。分明道德之眞偽。既達其意。而「不」又見其「人」心。世俗以「為自」古之「而」傳「之」者爲重。而以今之作者爲輕。淡於所見。甘於所聞。惑於外貌。失於中情。聖人不貴寡「寬」。而世人賤衆。五穀養「性」生。而棄之於地。珠玉無用。而寶之於身。故舜奔黃金於嶠崑之山。禹捐珠玉於五湖之淵。將以杜淫邪之欲。絕琦瑋之情。道近不必出於久遠。取其至要而有成。春秋

むる所なればなり。

善く古を言う者は、之を今に合し、能く遠きを術ぶる者は、之を近きに考う。故に事を説く者、上は五帝の功を陳じて、之を身に思い、下は桀紂の敗を列して、之を己れに戒む。

聖人は徳は以て日月に配すべく、行いは以て神靈に合すべし。高きに登り遠きに及び、幽に達し冥に洞る。之を無聲に聴き、之を無形に視る。其兆を覩ざるなく、其情を知らざるなし。五經の本末を校脩し、道德の眞偽を分明す。既にその意に達して、又その心を見る。世俗は古より傳わる者を以て重しとなし、今の作者を以て輕しとなす。見るところに淡くして、聞く所を甘しとす。外貌に惑わされて、中情を失す。聖人は寡きものを貴ばず、而して世人は衆きものを賤しむ。五穀は生を養うものなるに、之を地に棄て、珠玉は無用なるに、之を身につけて寶とす。故に舜は黄金を嶠崑の山に弃て、禹は珠玉を五湖の淵に捐てたり。將に以て淫邪の欲を杜ぎ、琦瑋の情を絶たんとするなり。道は近くして必ずしも久遠に出でず。その至要を取りて成るあるのみ。春秋は上は五帝に及ばず、下は三王に至

上不及五帝。下不至三王。述齊桓晉文之小善。魯〔之〕十二公〔至今〕之弊。〔爲〕政。至今。足以知成敗之効。何必於三王。故古人之所行者。亦與今世同。立事者不離道德。調絃者不失宮商。天道調四時。人道治五常。周公與堯舜合符瑞。二世與桀紂同禍殃。文王生於東夷。大禹出於西羌。世殊而地絕。法合而度同。故聖賢與道合。愚者與禍同。懷德者應以福。挾惡者報以凶。德薄者位危。去道者身亡。萬世不易法。古今同紀綱。故良馬非獨騏驎。利劍非唯干將。美女非獨西施。忠臣非獨呂望。今有馬而無王良之御。有劍而無砥礪之功。有女而無芳澤之飾。有士而不遭文王。道術蓄積而不舒。美玉韞匱而深藏。故懷道者須世。抱璞〔樸〕者待工。道爲智者設。〔讒〕。馬爲御者良。賢爲聖者用。辯爲智者通。書爲曉者傳。事爲見者明。故制事者因其則。服藥者因

らず。齊桓・晉文の小善、魯の十二公の弊政を述ぶ。今に至り、以て成敗の効を知るに足る。何ぞ必ずしも三王に於てせんや。故に古人の行いし所の者は亦、今世と同じ。事を立つるには道德を離れず、絃を調するには宮商を失せず。天道は四時を調し、人道は五常を治む。周公は堯舜と符瑞を合し、二世は桀紂と禍殃を同じくす。文王は東夷に生れ、大禹は西羌より出ず。世殊なりて地絶るも、法は合して度は同じ。故に聖賢は道と合し、愚者は禍と同じ。徳を懷く者には應ずるに福を以てし、惡を挾む者には報いるに凶を以てす。徳の薄き者は位危うく、道を去る者は身亡ぶ。萬世、法を易えず、古今、紀綱を同じくす。故に良馬は獨り騏驎のみならず、利劍は唯に干將のみにあらず。美女は獨り西施のみならず、忠臣は獨り呂望のみにあらず。今、馬ありて王良の御なく、劍ありて砥礪の功なし。女ありて芳澤の飾りなく、士ありて文王に遭わず。道術、蓄積せられて舒びず、美玉、韞匱せられて深く藏る。故に道を懷く者は世を須ち、璞を抱く者は工を待つ。道は智者の爲に設けられ、馬は御者の爲に良く、賢は聖者の爲に用いられ、辯は智者の爲に通じ、書は曉る者の爲に傳わり、事を見る者の爲に明かなればなり。故に事を制する者は其の則に因り、藥を服する者は其の方に因る。書は必ずしも仲尼の門に起らず、藥は必ずしも扁鵲の戸より出でず。善に合する者は、以て法と爲すべく、世に因りて權を行ふな

其方〔良〕。書不必起仲尼之門。藥不必出扁鵲之戶〔方〕。合〔之者〕善者。可以爲法。因世而行。權〔行〕。故性藏於人。則氣達於天。纖微造〔浩〕大。下學上達。事以類相從。聲以音相應。道唱而德和。仁立而義興。王者行之於朝。正夫行之於田。治末者調其本。端影者正其形。養其根者〔則〕枝葉茂。〔志氣〕調其氣者。〔即〕道志冲。故求遠者。不可先於近。治影者不可忘其容。上明而下清。君聖而臣忠。或圖遠而失近。或道杳〔塞〕而路窮。季孫貪顓臾之地。而變起於肅牆之內。夫進取者不可不顧難。謀事者不可不盡忠。故刑〔形〕立則德散。佞用則忠亡。詩云。式訛爾心。以蓄萬邦。言一心化天下。而民寧國治。此之謂也。

輔政第三

夫居高者自處。不可以不安。履危者任杖。不可

り。故に性、人に蔵せられて、氣は天に達す。纖微より大を造し、下學して上達す。事は類を以て相從い、聲は音を以て相應ず。道唱えられて德和し、仁立ちて義興る。王者は之を朝に行い、正夫は之を田に行う。末を治むるには其の本を調し、影を端すには其の形を正しくす。其の根を養えば、枝葉茂り、其の氣を調すれば道志冲し。故に遠きを求むるには、近きを失うべからず、影を治むるには、其の容を忘るべからず。上明かなれば下清く、君聖なれば臣忠なり。或いは遠きを圖りて近きを失し、或いは道杳かにして路窮まる。季孫は顓臾の地を貪りて、變、肅牆の内に起る。夫れ進取する者は難を顧みざるべからず、事を謀る者は忠を盡さざるべからず。故に刑立てば德散じ、佞用いらるれば忠亡ぶ。詩に云う、式って爾が心を化し、以て萬邦を蓄なり、と。言うところは、一心もて天下を化し、民寧くして、國治まる、とは、この謂ぞ、となり。

夫れ高きに居るには、自ら處するに以て安からざるべか

以不固。自處不安則墜。任杖不固則仆。是以聖人。居高處上。則以仁義爲巢。乘危履傾。則以賢聖爲杖。故高而不墜。危而不仆。昔者堯以仁義爲巢。舜以〔禹〕稷契爲杖。故高而益安。動而益固。〔然〕處宴安〔高〕之臺〔安〕。乘克讓之塗〔敬〕。德配天地。光被四表。功垂於無窮。名傳於不朽。蓋自處得其巢。任杖得其材也。秦以刑罰爲巢。故有覆巢破卵之患。以趙高李斯爲杖。故有傾仆跌傷之禍。何者〔哉〕所任者非也。故杖聖者帝。杖賢者王。杖仁者霸。杖智〔義〕者強。杖讒者滅。杖賊者亡。故懷剛者久而跌〔缺〕。持柔者久而長。躁疾者爲蹶失〔蹶速〕。遲重者爲常存。尚勇者爲悔吝〔近〕。溫厚者行寬舒。〔懷〕促急者必有所虧。柔懦者能制剛強。小慧者不可以禦大。小辯者不可以說衆。商賈巧爲販賣之利。而〔屈〕不能爲貞良。邪臣好爲〔詐僞〕自媚飾

らず、危きを履むには、杖に任ずるに以て固からざるべからず。自ら處するに安からざれば墜ち、杖に任ずるに固からざれば仆る。是を以て聖人の高きに居り上に處るには、仁義を以て巢となし、危きに乗り傾けるを履むには、賢聖を以て杖となす。故に高くして墜ちず、危くして仆れず。昔は堯は仁義を以て巢となし、舜は稷・契を以て杖となす。故に高くして益々安く、動いて益々固し。宴安の臺に處り、克讓の塗に乗り、徳は天地に配し、光は四表を被う。功は無窮に垂れ、名は不朽に傳わる。蓋し自ら處るに其の巢を得、杖に任ずるに其の材を得たればなり。秦は刑罰を以て巢となす、故に覆巢破卵の患あり。趙高・李斯を以て杖となす。故に傾仆跌傷の禍あり。何となれば任ずる所の者非なればなり。故に聖を杖とする者は帝たり、賢を杖とする者は王たり、仁を杖とする者は霸たり、智を杖とする者は強し。讒を杖とする者は滅び、賊を杖とする者は亡ぶ。故に剛を懷く者は久しくして跌ツクき、柔を持する者は久しくして長ず。躁疾なる者は蹶失をなし、遲重なる者は常存をなす。勇を尚ぶ者は悔吝をなし、溫厚なる者は寬舒を行う。促急なる者は必ず虧くる所あり、柔懦なる者は能く剛強を制す。小慧なる者は以て大を禦トドむべからず、小辯なる者は以て衆を説くべからず。商賈は巧みに販賣の利をなして、貞良たる能わず、邪臣は好んで自ら媚び非を飾るをなして公方たる能わず。その端巧を藏するも、その事功

非。而不能爲公方。藏其端巧。〔逃〕逸其事功。故智者之所短。不如愚者之所長。文公種米。曾子駕羊。相士不熟。信邪失方。察察者有所不見。恢恢者何所不容。朴直〔質〕者近忠。便巧者近佞〔亡〕。君子遠熒熒之色。放錚錚之聲。絕甜〔恬〕美之味。疏噓嘔之情。天道以大制小。以重顛輕。不以小治大。亂度干貞。讒夫似賢。美言似信。聽之者惑。觀之者冥。故蘇秦尊於諸侯。商鞅顯於西秦。世無賢智之君。孰能別其形。故堯放驩兜。仲尼誅少正卯。甘言之所喜〔嘉〕。靡不爲之傾。惟堯知其實。仲尼見其情。故干聖王者誅。〔退〕謁賢君者刑。遭凡王者貴。〔觸〕遯亂世者榮。鄭僇亡齊而歸魯。齊有九合之名。而魯有乾時之恥。夫據千乘之國。而信讒佞之計。未有不亡者也。故詩云。讒人罔極。交亂四國。衆邪合黨。以傾〔回人〕一君。邦危民〔亡〕失。不

を逸するなり。故に智者の短とする所は、愚者の長ずる所に如かず。文公、米を種え、曾子、羊に枷す。士を相するに熟せず、邪を信じて方を失う。察々たる者も見ざる所あり、恢々たる者も何の容れざる所あらん。朴直なる者は忠に近く、便巧なる者は佞に近し。君子は熒々の色を遠ざけ、錚々の聲を放つ。甜美の味を絶ち、噓嘔の情を疏んず。天道は大を以て小を制し、重きを以て輕きを顛う。小を以て大を治め、度を亂し、貞を干さず。讒夫は賢に似たり、美言は信に似たり。之を聴く者は惑い、之を觀る者は冥めく。故に蘇秦は諸侯に尊ばれ、商鞅は西秦に顯われたり。世に賢智の君なくんば、孰か能く其の形を別たんや。故に堯は驩兜を放ち、仲尼は少正卯を誅す。甘言の喜ばす所、之が爲に傾かざるはなし。惟だ堯のみ其の實を知り、仲尼のみ其の情を見る。故に聖王に干むる者は誅せられ、賢君に謁する者は刑せられ、凡王に遭う者は貴ばれ、亂世に遯う者は榮えたり。鄭僇、齊を亡げて魯に歸すれば、齊に九合の名ありて、魯に乾時の恥あり。夫れ千乘の國に據りて讒佞の計を信ずれば、未だ亡びざる者あらざるなり。故に詩に云う、讒人は極まりなし、交ごも四國を亂る、と。衆邪、黨を合して以て一君を傾く。邦危くして民失わる。亦宜ならずや。

亦宜乎。

無爲第四

夫道莫大於無爲。行莫大於謹敬。何以言之。昔虞舜治天下。彈五絃之琴。歌南風之詩。寂若無治國之意。漢若無憂民之心。〔然〕而天下治。周公制作禮樂。郊天地。望山川。師旅不設。刑格法懸。而四海之內。奉供來臻。越裳之君。重譯來朝。故無爲〔也〕而〔乃〕無不爲也。秦始皇帝。設爲車裂之誅。以斂姦邪。築長城於戎境。以備胡越。征大吞小。威震天下。將〔帥〕師橫行。以服外國。蒙恬討亂於外。李斯治法於內。事逾煩。而天下逾亂。法逾滋。而姦邪逾熾。兵馬益設。而敵人逾多。秦非不欲爲治。然失之者。乃舉措暴〔衆〕驟。而用刑太極故也。是以君子。尙寬舒以〔苞〕保身。行中和以〔統〕致遠。民畏其威。而從其化。懷其德。而歸其境。美其治。而

夫れ道は無爲より大なるはなく、行いは謹敬より大なるはなし。何を以て之を言うや。昔、虞舜の天下を治むるや、五弦の琴を弾じ、南風の詩を歌い、寂として治國の意なきが如く、漢として憂民の心なきが如くして天下治まる。周公は禮樂を制作し、天地を郊し、山川に望し、師旅設けず、刑は格せられ、法は懸けられ、而して四海の内、奉供して來り臻り、越裳の君、譯を重ねて來朝す。故に無爲にして、而も爲さざること無きなり。秦の始皇帝は車裂の誅を設爲して以て姦邪を斂め、長城を戎境に築きて、以て胡越に備えんとす。大を征し、小を吞み、威は天下に震う。師を將いて橫行し、以て外國を服す。蒙恬は亂を外に討ち、李斯は法を内に治む。事いよいよ煩にして、天下いよいよ亂れ、法いよいよ滋くして姦邪いよいよ熾んに、兵馬益々設けられて、敵人いよいよ多し。秦は治を爲すを欲せざるにあらず、然して之を失するは、乃ち舉措すること暴驟にして、刑を用うるに太はだ極まるが故なり。是を以て君子は寬舒を尙びて以て身を保ち、中和を行いて以て遠きを致す。民はその威を畏れて、その化に従い、その德に懷きて、その境に歸す。その治を美として、敢てその政に違わず。民は罰せずして罪を畏れ、賞せずして歡悦す。

不敢違其政。民不罰而畏罪。不賞而歡悅。漸漬於道德。被服於中和之所致也。夫法令者。所以誅惡。非所以勸善。故曾閔之孝。夷齊之廉。豈畏死而爲之哉。教化之所致也。故曰。堯舜之民。可比屋而封。桀紂之民。可比屋而誅者。教化使然也。故近河之地濕。近山之〔土燥〕木長。以類相及也。故高山〔川〕出雲〔兩〕。丘阜生氣。四瀆東流。百川無西〔不從〕。小者從大。少者從多。夫王者之都。南面之君。〔臣〕百姓之所取法者也。故舉措動作。不可失法〔則〕度也。昔者周襄王。不能事後母。出居於鄭。而下多叛其親。秦始皇〔王〕皇。驕奢靡麗。好〔作〕高臺榭。廣宮室。則天下豪富。制屋宅者。莫不倣之設房闔。備廐庫。繕雕琢刻畫之好。博玄黃琦瑋之色。以亂制度。齊桓公好婦人之色。妻姑姊妹。而國中多淫於骨肉。楚平王奢侈縱恣。不能制下。檢民以德。增

漸く道德に漬り、中和に被服されしの致す所なり。夫れ法令とは、惡を誅する所以にして、善を勸むる所以にあらず。故に曾・閔の孝、夷・齊の廉は豈に死を畏れて之を爲すならんや。教化の致す所なるなり。故に曰く、堯舜の民は比屋にして封ずべく、桀紂の民は比屋にして誅すべしとは、教化の然らしめしなり。故に近河の地は濕おい、近山の木は長しと、類を以て相及べばなり。故に高山は雲を出し、丘阜は氣を生ず。四瀆東に流るれば、百川西するものなし。小は大に従い、少きは多きに從う。夫れ、王者の都と南面の君とは、百姓の法を取る所なり。故に舉措動作、法度を失すべからざるなり。昔は周の襄王、後母に事うる能わず、出でて鄭に居る。而して下多く其の親に叛く。秦の始皇は驕奢靡麗、好んで臺榭を高くし、宮室を廣くすれば、則ち天下の豪富、屋宅を制する者、之に倣って房闔を設け、廐庫を備え、雕琢刻畫の好を繕め、玄黃琦瑋の色を博めて、以て制度を亂さざるはなし。齊の桓公は婦人の色を好み、姑姊妹を妻として、國中多く骨肉に淫す。楚の平王は奢侈縱恣にして、下を制し民を檢するに德を以てする能わず。駕を増すこと百馬にして行き、天下の人の財に饒かに富利なる者をして、及ぶべからざることを明にせしめんと欲す。是において楚國いよいよ奢にして、君臣別なし。故に上の下を化するのは、なお風の草を靡かすが如きなり。王者、武を朝に尚べば、農夫は甲を田に繕らう。故

駕百馬而行。欲令天下人。〔餒〕饒。財富利。明不可及。於是楚國逾奢。君臣無別。故上之化下。猶風之靡草也。王者尙武於朝。則農夫繕甲於田。故君之御下。民奢侈者。則應之以儉。驕淫者。則統之以理。未有上仁而下殘。上義而下爭者也。孔子曰。移風易俗。豈家至之哉。〔先〕亦取之於身而已矣。

辨惑第五

夫舉事者。或爲善而不稱善。或爲不善而稱善者何。視之者謬。而論之者誤也。故行或合於世。或順於耳。斯乃阿上之意。從上之旨。〔操〕揉直而乖方。懷曲而合邪。因其剛柔之勢。爲〔作〕此縱橫之術。故無忤逆之言。無不合之義。昔者〔昔〕哀公問於有若曰。年飢用不足。如之何。有若對曰。盍徹乎。蓋損上而歸之於下。則忤於耳。而不合於意。遂〔逆〕卻而不用也。此所謂正

に君の下を御するや、民奢侈なれば、之に應ずるに儉を以てし、驕淫なれば、之を統ぶるに理を以てす。未だ上仁なるに下殘い、上義なるに下争うことあらざるなり。孔子曰く、風を移し俗を易えんするも、豈に家ごとに之に至らんや、と。亦た之を身に取るのみなり。

夫れ事舉ぐる者、或いは善をなして善と稱せられず、或いは不善をなして善と稱せらるるは何ぞや。之を視るもの謬りて、之を論ずる者誤てばなり。故に行い或いは世に合し、或いは耳に順うも、これ乃ち上の意に阿ねり、上の旨に従うのみ。直を揉めて方に乖き、曲を懷いて邪に合し、その剛柔の勢いに因り、此の縱横の術を爲す。故に忤逆の言なく、合せざるの義なし。昔は哀公、有若に問いて曰く、年飢えて用足らず。之を如何せんや、と。有若對えて曰く、何ぞ徹せざるや、と。蓋し、上を損して之を下に歸せんとす。則ち耳に忤いて、意に合せず、遂に卻けて用いざるなり。これいわゆる、其の行を正しくして、世に苟合

其行。而不苟合於世也。有若豈不知阿哀公之意。爲益國之〔義〕議哉。夫君子直道而行。知必屈辱而不避也。故行不敢苟合。言不爲苟容。雖無功於世。而名足稱也。雖〔言〕不用於國〔家〕。而〔舉措之〕言可法也。故舉錯殊於世俗。則身孤於士衆。夫邪曲之相銜。枉撓之相錯〔借〕。正直者〔故〕不得容其間。諂佞之相扶。讒口之相譽。衆多而辭語諧合。無高而不可上。無深而不可往〔者〕。何以〔當〕悖背。〔衆多而辭語諧合〕夫衆口之毀譽。浮石沈木。群邪之所抑。以直爲曲。視之不察。以白爲黑。夫曲直之異形。白黑之異色。乃天下之易見也。然目謬心惑也。或不能分明其是非者。衆邪誤之矣。至如秦二世之時。趙高駕鹿而從行。王曰。丞相何爲駕鹿。高曰馬也。王曰。丞相誤也。以鹿爲馬。高曰。陛下以臣言爲不然。願問群臣。群臣半言

せざるなり。有若は豈に、哀公の意に阿ねりて、益國の議をなすことを知らざらんや。夫れ君子は直道にして行なう。必ず屈辱せらるるを知るも避けざるなり。故に行い敢て苟合せず、言うこと苟容をなさず。世に功なしと雖も、名は稱するに足り、國に用いられずと雖も言は法とすべきなり。故に舉錯、世俗に殊なれば、身は士衆に孤なり。夫れ邪曲の相銜む、枉撓の相錯わる、正直なる者は其間に容れらるを得ず。諂佞の相扶くる、讒口の相譽むる、衆多にして辭語諧合すれば、高しとして上るべからざるなく、深しとして往くべからざるはなし。何を以てか悖背せんや。夫れ衆口の毀譽は、石を浮せて木を沈ませ、群邪の抑うるところは、直を以て曲となす。これを視て察せざれば、白を以て黒となす。夫れ曲直の形を異にし、白黒の色を異にするは、乃ち天下の見易きものなり。然れども目謬りて心惑うや、或いはその是非を分明する能わざることあり、衆邪の之を誤まるなり。秦の二世の時の如きに至りては、趙高、鹿に駕して從行せんとす。王曰く、丞相何すれぞ鹿に駕するや。高曰く。馬なり。王曰く、丞相誤れり、鹿を以て馬となすや。高曰く、陛下、臣の言を以て然らずとせば、願わくは群臣に問え、と。群臣、半は鹿といい、半は馬という。この時に當り、秦王自らその目を信ずる能わず、而して邪臣の説に従う。夫れ、馬と鹿の形を異にするは、衆人の知る所なり。然れども是非を分別する能わざり

鹿。半言馬。當此之時。秦王不能自信其目。而從邪臣之說。夫馬鹿之異形。衆人所知也。然不能分別是非也。況於闇昧之事乎。易曰。二人同心。其義斷金。群黨合意。以傾一君。孰不移哉。昔人有與曾子同姓。亦名參。有人告其母。參殺人。母織如故。有〔人〕頃復來告。如是者三。曾子母乃投杼。踰垣而去。曾子之母。非不知子不殺人也。言之者衆。夫流言之並至。雖眞聖不敢自安。況凡人乎。魯定公之時。與齊公會於夾谷。孔子行相事。兩君升壇。兩相處下〔而相〕欲揖。君臣之禮。濟濟備焉。齊人鼓噪而起。欲執魯公。孔子歷階而上。不盡一等而立。謂齊侯曰。兩君合好。以禮相率。以樂相化。臣聞。嘉樂不野合。犧象之薦不下堂。夷狄之民。何〔求〕來爲。命司馬請止之。定公曰諾。齊公遂巡而避席曰。寡人之過。退而自責大夫。罷會。

しなり。況んや闇昧の事においてをや。易に曰く、二人心を同じくすれば、其の義、金を断つ、と。群黨、意を合して、以て一君を傾けんに、孰か移されざらんや。昔人、曾子と同姓にして亦名の參なるものありき。人ありて、その母に、參の人を殺せしを告ぐ。母、織ること故の如し。頃らくありて、復た来り告ぐ。是の如きこと三たびす。曾子の母乃ち杼を投じ、垣を踰えて去れり。曾子の母は子の人を殺さざるを知らざるにはあらず。これを言う者衆かりき。夫れ流言の並び至るや、眞聖と雖も、敢て自ら安んぜず。況んや凡人をや。魯の定公の時、齊公と夾谷に會す。孔子、相の事を行う。兩君、壇を升り、兩相は下に處りて揖せんと欲す。君臣の禮、濟々として備わりたり。齊人、鼓噪して起ち、魯公を執えんと欲す。孔子、歴階して上り、一等を盡さずして立ち、齊侯に謂いて曰く、兩君、好みを合するに、禮を以て相率い、樂を以て相化す。臣聞くならく、嘉樂は野に合せず、犧象の薦は堂より下さずと。夷狄の民、何ぞ來ることを爲さんや。司馬に命じて、之を止むるを請わん、と。定公曰く、諾、と。齊公、遂巡として席を避けて曰く、寡人の過ちなり、と。退いて自ら大夫を責む。會を罷むるとき、齊人、優旃をして魯公の幕下に舞わしめ、傲戯して魯君の隙を候い、以て定公を執えんと欲す。孔子嘆じて曰く、君辱めらるれば、臣當に死すべし、と。司馬をして法を行い、これを斬らしめ、首足、門

齊人使優旃儼於魯公之幕下。傲戲欲候魯君之隙。以執定公。孔子嘆曰。君辱臣當死。使司馬行法斬焉。首足異門〔河〕而出。於是齊人懼然而恐。君臣易操。不安其故行。乃歸魯四邑之侵地。終無乘魯之心。隣疆振動。人懷嚮魯之意。強國驕君。莫不恐懼。邪臣佞人。變行易慮。天下之政取法而折中。而定公拘於三家。陷於衆口。不能卒用孔子者。內無獨見之明。外惑邪臣之黨。以弱其國。而亡其身。權歸於三家。邑土單於彊齊。夫用人若彼。失人若此。然定公不覺悟。信季孫之計。背貞臣之策。以獲拘弱之名。而喪丘山之功。不亦惑乎。故邪臣之蔽賢。猶浮雲之障日月也。〔非〕能得神靈之化。罷雲霽翳。令歸山海。然後乃得覩其光明。暴天下之濡濕。照四方之晦冥。今上〔無〕戴明王聖主。下〔無〕擁貞正諸侯。能誅鋤姦臣賊子之黨。解釋疑跼紕繆。

を異にして出でしむ。是に於いて齊人、懼然として恐れ、君臣、操を易う。その故行に安んぜず、乃ち魯に四邑の侵地を歸えす。終に魯に乗ずるの心なく、隣疆振動し、人ごとに魯に嚮うの意を懷く。強國、驕君も、恐懼せざるはなく、邪臣佞人も、行を變じ慮を易う。天下の政、法を取りて折中す。而も定公は三家に拘せられ、衆口に陥られ、孔子を卒用すること能わざりしは、内に獨見の明なく、外は邪臣の黨に惑わされ、以てその國を弱めて、その身を亡ぼし、權は三家に歸し、邑土は彊齊に單きしなり。夫れ人を用うる彼の如く、人を失う此の如し。然れども定公、覺悟せず、季孫の計を信じ、貞臣の策に背き、以て拘弱の名を獲、丘山の功を喪えり。亦惑わずや。故に邪臣の賢を蔽うは、猶お浮雲の日月を障るがごとし。能く神靈の化を得て、雲を罷め翳を霽らし、山海に歸せしむれば、然る後に乃ちその光明を觀るを得て、天下の濡濕を暴かし、四方の晦冥を照さん。いま上に明王聖主を戴き、下に貞正の諸侯を擁す。能く姦臣賊子の黨を誅鋤し、疑跼紕繆の結を解釋すれば、然る後に忠良方直の人、則ち世に容れられて政に施すあるを得ん。故に孔子は君暗く臣亂れ、衆邪位にあり、政道は三家に隔てられ、仁義は公門に閉さるるに遭う。故に邱陵の歌を作り、世に權力なきを傷む。大化絶たれて通ぜず、道德弛んで用いられず。故に曰く、之を如何せんとするなき者は、吾もこれを如何ともするなきなり、

之結。然後忠良方直之人。則得容於世而施於政。故孔子遭君暗臣亂。衆邪在位。政道隔於三家。仁義閉於公門。故作「公」邱陵之歌。傷無權力於世。大化絕而不通。道德「施」弛而不用。故曰。無如之何者。吾末如之何也已矣。「夫」言道因權而立。德因勢而行。不在其位者。則無以齊其政。不操其柄者。則無以制其綱「剛」也。詩云。有斧「有」無柯。言何以治之也。

慎微第六

夫建大功於天下者。必先脩於閨門之內。垂大名於萬世者。必先行之於纖微之事。是以伊尹。負鼎「屈」俎於有莘之野。修「達」道。德於草廬之下。躬執農夫之作。意懷帝王之道。身在衡門之裏。志圖八極之表。故釋負鼎之「志」恥。爲天子之佐。剋夏立商。誅逆征暴。除天下之患。辟殘賊之類。然後海內治。百姓寧。曾子孝於父母。昏

と。言うところは、道は權に因りて立ち、徳は勢に因りて行わる。その位にあらざる者は、以てその政を齊うるなく、その柄を操らざる者は、以てその綱を制するなしとなり。詩に云う、斧あるも柯なし、と。言うところは何を以て之を治めんや、となり。

夫れ大功を天下に建つる者は、必ず先ず閨門の内を脩め、大名を萬世に垂るる者は必ず之を纖微の事に行う。是を以て伊尹は鼎俎を有莘の野に負い道德を草廬の下に修む。躬つから農夫の作を執り、意は帝王の道を懷き、身は衡門の裏にあり、志は八極の表を圖る。故に負鼎の恥を釋て、天子の佐となり、夏に剋ち商を立て、逆を誅し暴を征し、天下の患を除き、殘賊の類を辟し、然る後海内治まり百姓寧し、曾子は父母に孝に、昏に定め晨に省し、寒温を調し、輕重を適のう。之を糜粥の間に勉め、之を衽席の上に行いて、徳美後世に重し。この二者は、之を内に修め、

定晨省。調寒溫。適輕重。勉之於糜粥之間。行之於衽席之上。而德美重於後世。此二者修之於內。著之於外。行之於小。顯之於大。顏回一簞食。一瓢飲。在陋巷之中。人不堪其憂。回也不改其樂。禮以行之。遜以出之。夫力學而誦詩書。凡人所能爲也。若欲移江河動太山。故人力所不能也。如調心〔在〕正己。背惡向善。不貪於財。不苟於利。分財取〔寬〕寡。服事取勞。此天下易知之道。易行之事也。豈有難哉。若造父之御馬。羿之用弩。則所謂難也。君子〔以不〕以其難不爲之也。亦〔故〕不〔知〕以爲善也。〔絕〕絀氣力尙德也。夫目不能別黑白。耳不能別清濁。口不能言善惡。則非所謂不能也。故〔設〕道者易〔見〕曉。所以通凡人之心。而達〔不能〕君子之行。道者人之所行也。夫大道履之而行。則無不〔能〕到。故謂之道。孔子曰。道之不行也。言人〔不能〕

之を外に著わす。之を小に行い、之を大に顯わす。顏回は一簞の食、一瓢の飲、陋巷の中にあり。人はその憂えに堪えず。回や其の樂しみを改めず。禮以て之を行い、遜以て之を出す。夫れ力學して詩書を誦するは、凡人の能く爲す所なり。若し江河を移し、太山を動かすは、故より人力の能わざる所なり。若し心を調し己を正し、惡に背き善に向い、財を貪らず利を苟くもせず、財を分つときは寡きを取り、服事するには勞を取るは、これ天下に知り易きの道、行い易きの事なり。豈に難きことあらんや。造父の馬を御し、羿の弩を用うるが如きは、いわゆる難きことなり。君子はその難きを以て之を爲さず、亦以て善とはなさざるなり。氣力を細〔シビ〕けて德を尚べばなり。夫れ目、黒白を別つ能わず、耳、清濁を別つ能わず、口、善惡を言う能わずとは、いわゆる能わざるにはあらざるなり。故に道なるものは曉し易し。凡人の心を通じて、君子の行いを達する所以なり。道とは人の行く所なり。夫れ大道は之を履みて行けば到らざるなし。故に之を道という。孔子曰く、道の行われざるや。とは、人の之を行うなきを言うなり。故に顏淵を謂いて曰く、之を用うれば行い、之を舍けば藏る。我と爾とこれあるかな、と。言うは顏淵、道世に在らいて之を用うるなきも、猶よく仁を懷き義を行い、纖微を分別し、天地を忖度せしとなり。何ぞ乃ち身を苦しめ形を勞し、深山に入りて神仙を求め、二親を弃て骨肉を捐れ、五

無行之。故謂顏淵曰。用之則行。舍之則藏。唯我與爾有是夫。言顏淵道〔施〕迂於世。而莫之用。猶〔人不〕能懷仁行義。分別纖微。忖度天地。何乃苦身勞形。入深山。求神仙。弃二親。捐骨肉。絕五谷。廢詩書。背天地之寶。求不死之道。非所以〔通〕濟世防非者也。若湯武之君。伊呂之臣。因天時而行罰。順陰陽而〔運〕動運。上瞻天文。下察人心。以寡服衆。以弱制強。革車三百。甲卒三千。征敵破衆。以報大讐。討逆亂之君。絕煩濁之原。天下和平。家給人足。足夫行仁。商賈行信。齊天地。致鬼神。河出圖。洛出書。因是之道。寄之天地之間。豈非古之所謂得道者哉。夫〔播〕披布革。亂毛髮。登高山。食木實。視之無優游之容。聽之無仁義之辭。忽忽若狂痴。推之不往。引之不來。當世不蒙其功。後代不見其才。君傾而不扶。國危而不持。

穀を絶ち詩書を廢し、天地の寶に背き、不死の道を求めんや。世を濟い非を防ぐ所以の者にあらざるなり。湯・武の君、伊・呂の臣の若きは、天時に因りて罰を行い、陰陽に順いて運を動らす。上は天文を瞻、下は人心を察し、寡を以て衆を服し、弱を以て強を制す。革車三百、甲卒三千もて、敵を征し衆を破り、以て大讐を報じ、逆亂の君を討ち、煩濁の源を絶つ。天下和平にして、家々給し、人々足る。正夫も仁を行い、商賈も信を行ふ。天地を齊え、鬼神を致し、河は圖を出し、洛は書を出だす。是の道に因り、之を天地の間に寄す。豈に古のいわゆる道を得たる者に非ずや。夫れ布革を披り、毛髮を亂し、高山に登り、木の實を食らい、之を視るに優游の容なく、之に聽くに仁義の辭なし。忽忽として狂痴の如く、之を推すも往かず、之を引くも來らず、當世はその功を蒙らず、後代もその才を見ず。君傾けられて扶けず、國危くして持えず。寂寞として隣りなく、寥廓にして獨り寐ぬ。世を避くと謂うべきも、道を懷くと謂うにはあらざるなり。故に身を殺して難を避けざるは計に非ざるなり。道を壊りて世を避くるは忠ならざるなり。是を以て君子の亂世に居るには、道德を含み、微善を採り、纖惡を絶ち、父子の禮を脩めて、以て君臣の序に及ぶ。乃ち天地の通道にして聖人の所爲なり。故に之を隱せば道となり、之を布けば文となる。詩は心にあるを志となし、口に出すを辭となす。邪僻を矯正し、純才

寂寞而無隣。寥廓而獨寐。可謂避世。非謂懷道者也。故殺身〔以〕不避難。則非計也。〔懷〕壞道而避世。則不忠也。是以君子居亂世。則〔含〕含道德。採微善。絕纖惡。脩父子之禮。以及君臣之序。乃天地之通道。聖人之所〔不夫〕爲也。故隱之則爲道。布之則爲文。詩在心爲志。出口爲辭。矯正〔以雅〕邪僻。砥礪〔鈍〕純才。雕琢文〔邪〕雅。抑〔定〕止狐疑。通塞〔理〕順理。分別然否。而情得以〔利〕和。而性得以治。綿綿漠漠。以道制之。察之無兆。〔道〕追之恢恢。不見其行。不覩其〔仁〕止。湛然未悟。久之乃殊。論思天地。動應樞機。俯仰進退。與道爲俱。藏之於身。優游待時。故道無廢而不興。器無毀而不治。孔子曰。有至德要道。以順天下。言德行而其下順之矣。

を砥礪し、文雅を雕琢し、狐疑を抑止し、塞を通じ理に順い、然と否とを分別す。而して情以て和すを得、性以て治まるを得、綿綿漠漠、道を以て之を制し、之を無兆に察し、之を恢恢に追う。その行くを見ず、その止まるを覩ず。湛然として未だ悟らず、久しくして乃ち殊かなり。天地を論思し、動くこと樞機に應じ、俯仰進退、道と俱たり。之を身に藏し、優游して時を待つ。故に道は廢すれども興らざるはなく、器は毀たるも治まらざるはなし。孔子曰く、至德要道あり、以て天下に順う、と。言うは德行われてその下、之に順うとなり。

資質第七

質美者以通爲貴。才良者以顯爲能。何以言之。
夫榱桷豫章。天下之名木。生於深山之中。產於
溪谷之傍。立則爲「太山」衆木之宗。仆則爲萬世
之用。浮於山水之流。出於冥冥之野。因江河之
道。而達於京師之下。因於斧斤之功。舒其文彩
之好。精悍直理。密緻博通。虫蝸不能穿。水濕
不能傷。在高柔軟。入地堅彊。無膏澤而光潤
生。不尅畫而文章成。上爲帝王之御物。下則賜
公卿庶賤。「不」亦得以備器械。「閉絕以關梁」乃「及」
隘於山阪之阻。隔於九峘之隄。仆於嵬崔之山。
頓於窅冥之溪。樹蒙籠蔓延而無間。石崔嵬嶄岩
而不開。廣者無舟車之通。狹者無步「檐」擔之蹊。
商賈所不至。工匠所不窺。知者所不見。見者所
不知。功弃而德亡。腐朽而枯傷。轉於百仞之壑。
惕然而獨僵。當斯之時。不如道傍之「枯」栝楊。

質の美なる者は、通を以て貴しとなし、才の良なる者は
顯を以て能となす。何を以て之を言うや。夫れ榱桷豫章は
天下の名木にして、深山の中に生じ、溪谷の傍に産し、立
てば衆木の宗となり、仆れては萬世の用となる。山水の流
れに浮び、冥冥の野に出で、江河の道に因りて、京師の下
に達す。斧斤の功に因りてその文彩の好を舒ぶ。精悍なる
直き理、密緻にして博通す。虫蝸も穿つこと能わず、水濕
も傷くること能わず、高きにありては柔軟にして、地に入
りては堅彊なり。膏澤なくして光潤生じ、尅畫せずして文
章成る。上は帝王の御物となり、下は則ち公卿庶賤に賜
い、亦以て器械に備うるを得るなり。乃わち山阪の阻に隘
せられ、九峘の隄に隔てられ、嵬崔の山に仆れ、窅冥の溪
に頓くに及んでは、樹は蒙籠蔓延して間なく、石は崔嵬
嶄岩として開かず、廣きも舟車の通ずるなく、狹きは步擔
の蹊なし。商賈の至らざる所、工匠の窺わざる所、知者の
見ざる所にして見者の知らざる所なり。功弃てられて德亡
び、腐朽して枯傷す。百仞の壑に轉び、惕然として獨り僵
る。斯の時に當りては道傍の栝楊の嶮巖詰屈して委曲直
からざるものに如かず、然れどもこれ大都の廣地に生じ、
大匠の邑土に近ければ、利器もて制斷し、規矩もて度量
し、堅きものは朽を補い、短きものは長きに續ぎ、大なる

累累詰屈。委曲不〔同〕直。然生於大都之廣地。近於大匠之〔名工〕邑土。則〔材〕利器制斷。規矩度量。堅者補朽。短者續長。大者治罇。小者治觴。飾以丹漆。〔斲〕燁以明光。上備太牢春秋禮〔犁〕容。〔褒〕裝以文彩。〔立〕行禮矜莊。冠帶正容。對酒行觴。卿士列位。布陳宮堂。望之者目眩。近之者鼻芳。故事閉之則絕。〔次〕啓之則通。抑之則沉。興之則揚。〔處〕僻地梗梓。賤於〔枯〕栝楊。德美非不相絕也。才力非不相懸也。彼則槁枯而遠弃。此則爲宗廟之器者。在通與不通。人亦如是也。夫窮澤據〔犁〕之民。〔據犁〕囑報接。耜之士。或懷不羈之才。〔身〕有〔堯舜〕皐陶之美。綱紀之能存乎身。萬世之術藏於心。然〔身〕不用於世者名不〔之〕通之故也。夫公卿之子弟。貴戚之黨友。雖無過人之才。然在尊重之位者。輔〔助〕之者強。飾之者〔巧〕衆。靡不達也。昔扁鵲

ものは罇を治め、小なるものは觴を治む。飾るに丹漆を以てし、燁すに明光を以てす。上は太牢・春秋の禮容に備え、装うに文彩を以てし、禮を行うこと矜莊、冠帶して容を正し、酒に對して觴を行はす。卿士位に列し、宮堂に布陳するに、之を望む者目眩めき、之に近づく者鼻芳ばし。故に事は之を閉せば絶ち、之を啓けば通じ、之を抑うれば沈み、之を興せば揚がる。僻地の梗梓は栝楊よりも賤し。德美相絶れざるにはあらず、才力相懸ならざるにはあらず。彼は槁枯して遠く弃てられ、此は宗廟の器となる者は、通と通ぜざれるとあり。人も亦是の如きなり。夫れ窮澤に犁に據るの民、耜を接つ土、或いは不羈の才を懷き、皐陶の美あり、綱紀の能、身に存し、萬世の術、心に藏す。然れども世に用いられざる者は名通ぜざるの故なり。夫れ公卿の子弟、貴戚の黨友は、人に過ぐるの才なしと雖も、然れども尊重の位にある者は、之を輔くる者強く、之を飾るもの衆くして、達せざるなければなり。昔は扁鵲、宋に居りて罪を宋君に得たり。出亡して衛にゆく。衛人の病んで將に死せんとする者あり。扁鵲その家に至り、爲に之を治めんと欲す。病者の父、扁鵲に謂いて曰く、吾が子の病い甚だ篤し。將に爲に良醫を迎えんとす。子の能く治むる所に非ざるなり、と。退けて用いず。乃ち靈巫をして福を求め命を請わしめ、對して呪せしむるに、病者卒いに死し、靈巫活かすこと能わざりき。夫れ扁鵲

居宋。得罪於宋君。出亡之衛。衛人有病將死者。扁鵲至其家。欲爲治之。病者之父。謂扁鵲曰。吾子病甚篤。將爲迎良醫。〔治〕非子所能治也。退而不用。乃使靈巫。求福請命。對〔扁鵲〕而呪。病者卒死。靈巫不能〔治〕活也。夫扁鵲天下之良醫。而不能與靈巫爭用者。知與不知也。故事求遠而失近。廣藏而狹奔。斯之謂也。昔宮之奇。爲虞公畫計。欲辭晉獻公璧馬之賂。而不假之夏陽之道。豈非金石之計哉。然虞公不聽者。惑於珍怪之寶也。鮑丘之德行。非不高於李斯趙高也。然伏隱於嵩廬之下。而不録於世。利口之臣害之也。凡人莫不知善之爲善。惡之爲惡。莫不知學問之有益於已。怠戲之無益於事也。然而爲之者。情欲放溢。而〔人不〕能勝其志也。人君莫不知求賢以自助。近〔賢〕聖以自輔。然賢聖或隱於田里。而不預國家之事者。乃觀聽

は天下の良醫にして、靈巫と用を争う能わざる者は、知ると知らざるとなり。故に事は遠きに求めて近きに失い、廣く藏して狭きに奔つ、とは斯のごときの謂なり。昔は宮之奇、虞公の爲に畫計し、晋の獻公よりの璧馬の賂を辭し、之に夏陽への道を假さざらんことを欲す。豈に金石の計にあらずや。然るに虞公の聽かざりし者は珍怪の寶に惑えばなり。鮑丘の德行は李斯・趙高よりも高からざるにあらず。然れども嵩廬の下に伏隱して世に録せられざるは、利口の臣の之を害すればなり。凡人も善の善たる、惡の惡たるを知らざるはなく、學問の己に益あり、怠戲の事に益なきを知らざるはなし。然り而して之を爲す者は、情欲放溢にして、能くその志に勝てばなり。人君は賢を求めて自ら助け、聖を近づけて以て自ら輔くるを知らざるはなし。然れども賢聖、或いは田里に隱れて國家の事に預らざる者は、乃ち觀聽の知、下に明かならずして、閉塞の譏、君に歸すればなり。閉塞の譏、君に歸すれば、忠賢の士、野に弃てられ、忠賢の士、野に弃てらるれば、佞臣の黨、朝に存す。佞臣の黨、朝に存すれば、下、君に忠ならず。下、君に忠ならざれば、上、下に明かならず。上、下に明かならず、これ天下の傾覆する所以なり。

之〔臣〕知。不明於下。則閉塞之譏歸於君。閉塞之譏歸於君。則忠賢之士奔於野。忠賢之士奔於野。則佞臣之黨存於朝。佞臣之黨存於朝。則下不忠於君。下不忠於君。則上不明於下。上下明於下。是故天下所以傾覆也。

至德第八

夫欲〔建〕富國彊威。辟地服遠者。必得之於民。欲立功興譽。垂名流光〔顯榮華〕者。必取之於身。故據萬乘之國。持百姓之命。苞山澤之饒。〔主〕致士衆之力。而功不在於身。名不顯於世者。乃統理之非也。天地之性。萬物之類。〔懷〕依道者衆歸之。恃刑者民畏之。歸之則附其側。畏之則去其域。故設刑者不厭輕。爲德者不厭重。行罰者不患薄。布賞者不患厚。所以來親近。而致疎遠也。夫〔形〕荷重者則身勞。事衆者則心煩。心煩者則刑罰縱橫。而無所〔立〕成。身勞者則百端

夫れ國を富まし威を彊し、地を辟き遠きを服せんと欲する者は、必ず之を民に得たり。功を立て譽を興し、名を垂れ光を流さんと欲する者は、必ず之を身に取る。故に萬乗の國に據り、百姓の命を持え、山澤の饒を苞み、士衆の力を致して、而も功の身にあらず、名の世に顯われざる者は、乃ち統理するの非なればなり。天地の性、萬物の類として、道に依る者には、衆これに歸し、刑を恃む者をば民之を畏る。之に歸すればその側に附し、之を畏るればその域を去る。故に刑を設くるには輕きを厭わず、德をなすには重きを厭わず。罰を行うには薄きを患えず、賞を布くには厚きを患えず。親近を來して疎遠を致す所以なり。それ荷重ければ身勞し、事衆ければ心煩わさる。心煩わさるれば刑罰縱橫にして成る所なく、身勞すれば百端廻邪にして就る所なし。是を以て君子の治をなすや、塊然として事な

廻邪。而無所就。是以君子之爲治也。塊然若無事。寂然若無聲。官府若無吏。亭落若無民。閭里不訟於巷。老幼不愁於庭。近者無所議。遠者無所聽。郵驛無夜行之吏。鄉閭無夜〔名〕召之征。犬不夜吠。〔鳥〕鷄不夜鳴。老者息於堂。〔丁〕壯者耕〔耘〕於田。在朝者忠於君。在家者孝於親。於是賞善罰惡。而潤色之。興辟雍庠序。而教誨之。然後賢愚異議。廉鄙異科。長幼異節。上下有差。強弱相扶。小大相懷。尊卑相承。鴈行相隨。不言而信。不怒而威。豈恃堅甲利兵。深刑刻法。朝夕切切。而後行哉。昔晉厲齊莊。楚靈宋襄。秉大國之權。杖衆民之威。軍師橫出。陵轢諸侯。外驕敵國。內克百姓。隣國之讐結於外。臣下之怨積於內。而欲建金石之〔功〕統。〔終〕傳不絕之世。豈不難哉。故死宋襄於泓水之戰。三君弑於臣子之手。皆輕用師。而尙威

きが如く、寂然として聲なきが如く、官府は吏なきが如く、亭落は民なきが如し。閭里は巷に訟たず、老幼は庭に愁えず。近き者は議する所なく、遠き者は聽く所なし。郵驛に夜行の吏なく、郷閭に夜召の征なし。犬は夜吠えず、鷄は夜鳴かず、老者は堂に息い、壯者は田に耕す。朝にある者は君に忠に、家にある者は親に孝なり。是において善を賞し惡を罰して之を潤色し、辟雍庠序を興して之を教誨し、然る後に賢愚議を異にし、廉鄙科を異にす。長幼節を異にし、上下差あり、強弱相扶け、小大相懷き、尊卑相承け、鴈行は相隨い、言わずして信あり、怒らずして威あり。豈に堅甲利兵、深刑刻法の朝夕切切なるを恃みて後行われんや。昔は晉の厲、齊の莊、楚の靈、宋の襄は、大國の權を秉り、衆民の威に杖り、軍師横出し、諸侯を陵轢す。外は敵國に驕り、内は百姓を克る。隣國の讐、外に結ばれ、臣下の怨み、内に積む。而して金石の統を建て、不絶の世に傳えんと欲するは、豈に難からずや。故に宋の襄は泓水の戰に死し、三君は臣子の手弑せられる。みな輕々しく師を用いて威力を尙び、以て斯に至る。故に春秋に重くして之を書し、嗟嘆して之を傷む。この三君はみなその威を強くせんとして國を失い、その刑を急にして自ら賊なり。斯れ乃ち去事の戒にして來事の師なり。魯の莊公は、一年の中、三時を以て築作の役を興し、山林草澤の利を規固し、民と田漁薪採の饒を爭う。桷に刻し楹を丹にし、

力。以至於斯。故春秋重而書之。嗟嘆而傷之。是三君皆強其〔盛〕威而失國。急其刑而自賊。斯乃去事之戒。來事之師也。魯莊公一年之中。以三時興築作之役。規固山林草澤之利。與民爭田漁薪菜之饒。刻桷丹楹。眩曜靡麗。收十二之稅。不足以供回邪之欲。膳不用之好。以快婦人之目。財盡於驕淫。〔人〕力罷於不急。上困於用。下飢於食。乃遣藏孫辰。請糴於齊。^③倉廩空匱。外人知之。於是爲宋陳衛所伐。賢臣出。叛臣亂。子般殺而魯國危。公子牙慶父之屬。敗上下之序。亂男女之別。繼位者無所定。逆亂者無所懼。於是齊桓公。遣大夫高子。立僖公而誅夫人。逐慶父而還季子。然後社稷復存。子孫反業。豈不謂微弱者哉。故爲威不〔強〕息還自亡。立法不明還自傷。魯莊公之謂也。故春秋穀〔缺〕

眩曜靡麗にして十に二の税を収むるも以て回邪の欲に供するに足らず、不用の好を繕りて、以て婦人の目を快くす。財は驕淫に盡き、力は不急に罷る。上は用に困しみ、下は食に飢う。乃ち藏孫辰を遣わして糴を齊に請わしむ。倉廩空匱にして、外人之を知る。是において宋陳衛の伐つ所となる。賢臣出でて、叛臣亂す。子般殺されて魯國危うし。公子牙・慶父の屬、上下の序を敗り、男女の別を亂し、位を繼ぐ者定まる所なく、逆亂する者、懼る所なし。是において齊の桓公、大夫高子を遣わして僖公を立て、夫人を誅し、慶父を逐いて季子を還えす。然る後に社稷復た存し、子孫業に反える。豈に微弱と謂わざらんや。故に威を爲して息めざる者は還つて自ら亡び、法を立て明かならざる者は還つて自ら傷くとは、魯の莊公の謂なり。故に春秋穀〔下缺〕

懷慮第九

●懷異慮者。不可以立計。持兩端者。不可以定威。故治外者必調內。平遠者必正近。綱紀天下。勞神八極者。則憂不存於家。養氣治性。〔思通精神〕延壽通命者。則志不役於外。據土子民治國〔治〕統衆者。不可以圖利〔治〕產業。則教化不行。而政令不從。蘇秦張儀。身尊於位。名顯於世。相六國事六君。威振山東。橫說諸侯。國異辭人異意。欲合弱而制彊。持橫而御縱。內無堅計。身無定名。功業不〔平〕成。中道而廢。身死於凡人之手。爲天下所笑者。乃由辭語不一。而情欲放佚故也。故管仲相桓公。詘節事君。專心一意。身無境外之交。心無欹斜之慮。正其國〔如〕而制天下。尊其君而屈諸侯。權行於海內。化流於諸夏。失道者誅。秉義者顯。舉一事而天下從。出一政而諸侯靡。故聖人執一政以

異慮を懷く者は以て計を立つべからず、兩端を持する者は以て威を定むべからず。故に外を治むる者は必ず内を調のえ、遠きを平ぐる者は必ず近きを正す。天下を綱紀し、八極に勞神する者は、憂い家に存せず、氣を養い性を治め、壽を延ばし命を通ぜんとする者は、志外に役せられず。土に據り民を子ない、國を治め衆を統ぶる者は以て產業を圖利すべからず。則ち教化行われずして政令従われざらんとするなり。蘇秦・張儀は身、位に尊く、名、世に顯われ、六國に相とし、六君に事え、威は山東に振い、諸侯に横説す。國ごとに辭を異にし、人ごとに意を異にす。弱を合して彊を制し、横を持して縦を御せんと欲するも、内に堅計なく、身に定名なし。功業成らず、中道にして廢す。身凡人の手に死して、天下の笑う所となりしは、乃ち辭語一ならずして情欲放佚なりしが故なり。故に管仲の桓公に相たるや、節を詘して君に事え、專心一意、身に境外の交わりなく、心に欹斜の慮なし。その國を正して天下を制し、その君を尊んで諸侯を屈す。權は海内に行われ、化は諸夏に流る。道を失う者は誅せられ、義を秉る者は顯わさる。一事を擧げて天下従い、一政を出して諸侯靡く。故に聖人は一政を執りて以て百姓を繩し、一槩を持して以て萬民を等しくす。一治を同じくし、一統を明かにする所以なり。故に天は大、一を以て數を成し、人は仁、二を以て倫を成

繩百姓。持一槩以等萬民。所以同一治。而明一統也。故天〔二〕大以〔大〕一。成數。人〔二〕仁以二成倫。楚靈王居千里之地。享百〔邑〕世之國。不先仁義而尙道德。懷奇伎求異巧。乖陰陽。合物怪。作乾谿之臺。立百仞之高。欲登浮雲窺天文。然身死於弃疾之手。魯莊公據中土之地。承聖人之後。不脩周公之業。繼先人之體。尙權杖威。有萬人之力。懷兼人之強。不能存立子糾。國侵地奪。以洙泗爲境。夫世人不學詩書。行仁義。履聖人之道。極經藝之深。乃論不驗之語。學不然之事。圖天地之形。說災變之異。乖先王之法。異聖人之意。惑學者之心。移衆人之志。指天畫地。是非世事。動人以邪變。驚人以奇恠。聽之者若神。視之者如異。然猶不可以濟於厄。而度其身。或觸罪而干法。不免於辜戮。故事不生於法度。道不本於天地。可言而不可行。

す。楚の靈王は千里の地に居り、百世の國を享く。仁義を先にし道德を尙ぶをせず、奇伎を懷い、異巧を求め、陰陽に乖き、物怪を合す。乾谿の臺を作り、百仞の高きに立ち、浮雲に登り、天文を窺わんと欲す。然れども身は弃疾の手に死す。魯の莊公は中土の地に據り、聖人の後を承く。周公の業を脩め先人の體を繼がんとせず、權を尙び威に杖る。萬人の力あり、兼人の強を懷くも、子糾を存立する能わずして、國侵され地奪われ、洙泗を以て境と爲す。夫れ世人は詩書を學び仁義を行わんとせず、聖人の道を履み經藝の深きを極めんとせず、乃ち不驗の語を論じ、不然の事を學び、天地の形を圖し、災變の異を説き、先王の法に乖き、聖人の意に異なり、學者の心を惑わし、衆人の志を移す。天を指し地を畫し、世事を是非し、人を動かすに邪變を以てし、人を驚かすに奇怪を以てす。之を聽けば神の如く、之を視れば異あるが如し。然れどもなお以て厄を濟いてその身を度うべからず。或いは罪に觸れ法を干して辜戮を免かれず。故に事の法度より生せず、道の天地に本つかざるものは、言うべくして行うべからず、聽くべくして傳うべからず、翫ぶべくして用うべからざるなり。故に物の可とする所も道の宜しき所にあらず、道の宜しき所も物の可とする所にあらず。是を以て事を制する者は惑うべからず、道を設くる者は迷うべからず。目は以て明を精め、耳は以て聽を主り、口は以て味を別ち、鼻は以て芳を

也。可聽而不可傳也。可翫而不可〔大〕用也。^④故物之所可。非道之所宜。道之所宜。非物之所可。是以制事者不可惑。設道者不可〔通〕迷。目以精明。耳以主聽。口以別味。鼻以聞芳。手以之持。足以之行。各受一性。不得兩兼。兩兼則心惑。二路者行窮。正心一堅。久而不忘。在上不逸。爲下不傷。執一統物。雖寡必衆。心佚情散。雖高必崩。氣泄生疾。壽命不長。顛倒無端。〔失〕大道不行。故氣感之符。清潔〔明〕光明。情素之表。恬暢和良。調密者固。安靜者祥。志定心平。血脉乃彊。秉政圖治。〔兩〕不失其中。〔方〕故戰士不耕。朝士不商。邪不奸直。圓不亂方。違戾相錯。撥〔刺〕刺難匡。故欲理之君。常閉利門。積德之家。必無災殃。利絶而道著。武讓而德興。斯乃持久之道。常行之法也。

聞ぎ、手は之を以て持ち、足は之を以て行く。各々一性を受け、兩つながら兼ねるを得ず。兩つながら兼ねれば心惑い、二路あるときは行くこと窮まる。心を正して一に堅く、久しくして忘れず、上にありて逸せず、下となりて傷まず、一を執りて物を統ぶれば、寡しと雖も心ず衆く、心佚し情散ずれば、高しと雖も必ず崩る。氣泄るれば疾を生じ、壽命長からず、顛倒端なければ、大道行われず。故に氣感の符は清潔光明にして、情素の表は恬暢和良なり。調密なる者は固く、安靜なる者は祥あり。志定まり心平かなれば血脉乃ち彊し。政を秉り治を圖り、その中を失わず、故に戰士は耕さず、朝士は商せず、邪は直を奸さず、圓は方を亂さず。違戾相錯われば、撥刺匡し難し。故に理を欲するの君は常に利門を閉し、積德の家には必ず災殃なし。利絶ちて道著われ、武讓りて德興る。斯れ乃ち持久の道、常行の法なるなり。

本行第十

治●以●德●爲●上●。行●以●〔仁〕義●爲●本●。故●尊●於●位●。而●無●德●者●黜●。富●於●財●。而●無●義●者●刑●。賤●而●好●德●者●尊●。貧●而●有●義●者●榮●。段●干●木●徒●步●之●士●。脩●道●行●德●。魏●文●侯●過●其●閭●而●軾●之●。夫●子●陳●蔡●之●厄●。豆●飯●菜●羹●。不●足●以●〔樓〕拯●餒●。一●三●子●布●弊●襜●袍●。不●足●以●避●寒●。倥●偬●〔屈●厄〕自●處●。屈●厄●甚●矣●。然●而●夫●子●當●於●道●。一●三●子●近●於●義●。〔自〕以●布●衣●之●士●。上●輔●天●子●。下●齊●庶●民●。〔而●累●其●身●而●匡●上●也●及〕閱●周●室●之●衰●微●。禮●義●之●不●行●也●。厄●挫●頓●仆●。歷●說●諸●侯●。欲●匡●帝●王●之●道●。反●天●下●之●政●。身●無●其●〔立〕位●。而●世●無●其●主●。周●流●天●下●。無●所●合●意●。大●道●隱●而●不●舒●。羽●翼●摧●而●不●申●。自●累●其●身●。深●授●其●化●。以●厚●終●始●。追●治●去●事●。以●正●來●世●。案●紀●圖●錄●。以●知●性●命●。表●定●六●藝●。以●序●五●經●。善●惡●不●相●干●。貴●賤●不●相●侮●。強●弱●不●相●凌●。賢●與●不●肖●。不●得●相●踰●。科●第●相●序●。

治は德を以て上となし、行いは義を以て本となす。故に位に尊くして德なき者は削し、財に富みて義なき者は刑せらる。賤けれども德を好む者は尊ばれ、貧なれども義ある者は榮えん。段干木は徒歩の士なるも、道を脩め徳を行えば、魏の文侯もその閭を過ぎるに之に軾す。夫子は陳蔡の厄に、豆飯菜羹、以て餓を拯うに足らず、二三子は布の弊襜袍、以て寒を避くるに足らず。倥偬として自ら處る、屈厄甚しいかな。然れども夫子は道に當り、二三子は義に近し。布衣の士を以て、上は天子を輔け、下は庶民を齊えんとす。周室の衰微して禮儀の行われざるを閱うるや、厄挫頓仆して諸侯に歴説し、帝王の道を匡し、天下の政を反さんと欲す。身にその位なくして世にその主なく、天下を周流して意に合する所なし。大道隠れて舒びず、羽翼摧かれて伸びず、自ら其の身を累わし、深く其の化を授く。厚を以て終始し、去事を追治して以て來世を正し、圖録を案紀して以て性命を知り、六藝を表定して以て五經を序いず。善と惡と相い干さず、貴賤と相い侮らず、強と弱と相い凌がず、賢と不肖と相い踰ゆるを得ず、科第相い序し、萬世の師となる。芳流れて絶えず、功傳わりて衰えず、詩書禮樂、各々その所を得たり。乃ち天道の立つる所、大義の行われし所なり。豈に偶然を以て成さんや。夫れ好人の色は

爲萬世師。芳流而不絕。功傳而不衰。詩書禮樂。爲各得其所。乃天道之所立。大義之所行也。豈以偶然〔威〕成耶。夫好人之〔好〕色。非脂粉所能飾。〔大〕天怒之威。非氣力所能行也。聖人乘天威。合天氣。承天功。象天容。而不與〔爲〕爭功。豈不難哉。夫酒池可以泛舟。糟丘可以望遠。豈貧於財哉。統四海之權。主九州之衆。豈弱於力哉。然功不能自存。威不能自守。非爲貧弱。乃道德不存乎身。仁義不加於天下也。故〔察〕富於財。而昏於道者。衆之所謀也。果於力而寡於義者。兵之所圖也。故君子篤於義。而薄於利。敏於事。而慎於言。所以參合功德也。故曰。不義而富且貴。於我如浮雲。夫身帶璧玉。〔庸〕腰服環佩〔服〕。府藏珍怪。玉斗酌酒。〔酌舍〕金銀刻鏤。可以夸小人。非所以厚於己。而濟於事也。高臺百仞。金殿十層。珠簾雕

脂粉の能く飾る所にあらず、天怒の威は氣力の能く行ふ所にあらざるなり。聖人は天威に乘じ、天氣に合し、天功を承け、天容に象どりて、與に功を爭わず。豈に難からずや。夫れ酒池は以て舟を泛ぶべく、糟丘は以て遠くを望むべし、豈に財に貧しからんや。四海の權を統べ、九州の衆を主どる、豈に力に弱からんや。然れども功は自ら存する能わず、威は自ら守る能わず、貧弱なるが爲にあらず、乃ち道德身に存せず、仁義天下に加わらざればなり。故に財に富んで道に昏き者は、衆の謀る所なり。力に果にして義に寡なき者は、兵の圖る所なり。故に君子は義に篤くして利に薄くし、事に敏にして言に慎しむ。功德を參合する所以なり。故に曰く、不義にして富み且つ貴きは、我に於いては浮雲の如し、と。夫れ身に璧玉を帶し、腰に環佩を服し、府に珍怪を藏し、玉斗もて酒を酌み、金銀もて刻鏤するは、以て小人に誇るべくして、己れに厚くし事を濟す所以にはあらざるなり。高臺百仞、金殿十層、珠簾雕飾は、百姓の力を疲らす所以にして弱を扶け亡を存する所以にあらざるなり。故に聖人は宮室を卑くして道德を高くし、衣服を惡くして仁義に謹む。その行いを損して以てその容を増すことをせず、その德を虧いて以てその身を飾ることをせず。國に益なきの功を興さず、家に用なきの器を藏せず。力役を稀にして貢獻を省く所以なり。璧玉珠璣、上に御せられざれば玩好の物、下に弃てられ、雕琢刻畫のもの

飾。所以疲百姓之力。非所以扶弱存亡者也。故聖人卑宮室。而高道德。惡衣服。而謹仁義。不損其行。以增其容。不虧其德。以飾其身。國不興無「事」益之功。家不藏無用之器。所以稀力役。而省貢獻也。璧玉珠璣。不御於上。則翫好之物。弃於下。雕琢刻「綰」畫。不納於君。則淫伎曲巧。絕於民。夫釋農桑之事。入山海。採珠璣。求瑤琨。探沙谷。捕翡翠。搜璊瑁。搏犀象。消筋力。散布泉。以極耳目之好。以快淫邪之心。豈不謬哉。未見先道而後利。近德而遠色者也。

明誠第十一

君勤於政。可以及遠。臣篤於信。可以致大。何以言之。湯以七十里之封。而升帝王之位。周公以三公官而比德於五帝。斯乃口出善言。身行善道之所致也。安危之効。吉凶之徵。一出於身。

君に納れられざれば、淫伎曲巧、民に絶たる。夫れ農桑の事を釋て、山海に入り、珠璣を採り瑤琨を求め、沙谷を採り、翡翠を捕え璊瑁を搜り、犀象を搏う。筋力を消し布泉を散じ、以て耳目の好を極め、以て淫邪の心を快くす、豈に謬らずや。未だ道を先にして利を後にし、德に近づきて色を遠ざくることを見ざるなり。

君政に勤めば、以て遠きに及ぶべく、臣信に篤ければ、以て大を致すべし。何を以て之を言うや。湯は七十里の封を以てして帝王の位に升り、周公は三公の官を以てして、德を五帝に比す。斯れ乃ち、口に善言を出し、身に善道を行ふの致す所なり。安危の効、吉凶の徵、一に身より出

順逆之道。成敗之驗。一起於行。堯舜不易日月而興。桀紂不易星辰而亡。天道不改。而人道易也。夫持天地之政。操四海之綱。屈申不可以失度。動作不可以離道。謬誤出於口。則亂及萬里之外。何況刑及無罪於獄。而殺及無辜於市乎。故世衰道亡。非天之所爲也。乃國君者。有所取之也。惡政生於惡氣。惡氣生於災異。〔蝮〕螟虫之類。隨氣而生。虹蜺之屬。因政而見。治道失於下。則天文〔度〕應於上。惡政流於民。則虫災生於地。賢君智辟。則知隨變而改。緣類而試。思之於地。異天變。聖人之理。恩及昆虫。澤及草木。乘天氣而生。隨寒暑而動者。莫不延頸而望治。傾耳而聽化。聖人察物。無所遺失。上及日月星辰。下至鳥獸草木。〔昆虫〕察六鵠之退飛。治五石之所隕。所以不失纖微。至於鴈鵠來。冬多麋。言鳥獸之類。非其常也。十有二月。李梅

で、順逆の道、成敗の驗、一に行いより起る。堯舜は日月を易えずして興り、桀紂は星辰を易えずして亡ぶ。天道改まらずして人道の易わりしなり。夫れ天地の政を持し、四海の綱を操るには、屈申にも以て度を失すべからず、動作にも以て道より離るべからず。謬誤、口より出ずれば、亂萬里の外に及ぶ。何ぞ況んや刑の無罪に獄に及び、殺の無辜に市に及ぶものをや。故に世衰え道亡ぶとは、天の爲す所にはあらず。乃ち國君たる者の之を取る所あるなり。惡政は惡氣を生じ、惡氣は災異を生ず。螟虫の類は氣に随つて生じ、虹蜺の屬は政に因りて見わる。治道下に失わるれば、天文上に應ず。惡政民に流るれば虫災地に生ず。賢君智辟は、變に随つて改め、類に縁つて試みることを知り、之を地異天變に思ふ。聖人の理(治)は、恩昆虫に及び、澤は草木に及ぶ。天氣に乗りて生じ、寒暑に随つて動くものは頸を延ばして治を望み、耳を傾けて化に聽わざるはなし。聖人は物を察するに遺失する所なし。上は日月星辰に及び、下は鳥獸草木に至る。六鵠の退飛を察し、五石の隕つる所を治めしは纖微を失わざる所以にして、鴈鵠來り、冬麋多きに至りては、鳥獸の類、その常に非ざるを言うなり。十有二月に李梅實のり、十月霜を殞すも菽を殺さずとは、寒暑の氣、その節を失うを言うなり。鳥獸草木も尚お各々その所を得んことを欲し、之を綱するに法を以てし、之を紀するに數を以てす。而るを況んや人に於てをや。聖人は

實。十月殞霜不煞菽。言寒暑之氣。失其節也。鳥獸草木。尙欲各得其所。綱之以法。紀之以數。而況於人乎。聖人承昊天^の之明。正日月之行。錄星辰之度。因天地之利。等高下之宜。設山川之便。平四海。分九州。同好惡。一風俗。易曰。天垂象。見吉凶。聖人則之。天出善道。聖人得之。言上御^{〔占〕}圖曆之變。下^{〔衰〕}哀風化之失。以匡衰紀盛^{〔紀〕}。物定世後。無不可行之政。無不可治之民。故曰則天之明。因地之利。觀天之化。推演萬事之類。散之於彌漫之間。調之以寒暑之節。養之以四時之氣。同之以風雨之化。故絕國異俗。莫不知嚮化者。樂則歌。哀則哭。盖聖人之教。所齊一也。夫善道存於^{〔身〕}心。無遠而不至。惡行著於身。無近而不去。周公躬行禮義。郊祀后稷。越裳奉貢。重譯而臻。麟鳳草木。緣化而應。殷紂拘囚微子。弃骨肉而

昊天之明を承け、日月の行を正し、星辰の度を録し、天地の利に因り、高下の宜しきを等しくし、山川の便を設け、四海を平にし、九州を分ち、好惡を同じくし、風俗を一にす。易に曰く、天は象を垂れ、吉凶を見し、聖人は之に則る。天は、善道を出し、聖人之を得たり、と。言うは、上は圖曆の變を御し、下は風化の失を哀れみ、以て衰を匡し盛を紀せしとなり。物は世にして後に定まり、行うべからざるの政なく、治むべからざるの民なし。故に曰く、天の明に則とり、地の利に因り、天の化を觀て、萬事の類を推演す。之を散ずるは彌漫の間に於てし、之を調うるに寒暑の節を以てし、之を養うに四時の氣を以てし、之を同じくするに風雨の化を以てす。故に絶國異俗も化に嚮うを知らざる者なし。樂しければ歌い、哀しければ哭す。蓋し聖人の教の齊一せし所なり。夫れ善道心に存すれば遠しとして至らざるなく、惡行身に著けば、近しとして去らざるはなし。周公躬つから禮儀を行ひ、后稷を郊祀すれば、越裳より貢を奉じ、譯を重ねて臻る。麟鳳草木も化に緣りて應ず。殷紂は微子を拘囚し、骨肉を弃てて亡びたり。善を行えば鳥獸も悦び、惡を行えば臣子も恐る。是を以て明なる者は以て遠きを致すべく、闇なる者は以て近きを離すべし。故に春秋に、衛侯の弟鮒、晉に出奔す、と書す。言うは鮒、骨肉の親を絶ち、大夫の位を弃て、先人の境を越え、他人の域に附し、窮して寒飢を渉り、履を織りて食う、不明の

亡。行善則鳥獸悅。行惡則臣子恐。是以明者可以致遠。〔鄒〕闇者可以離近。故春秋書。衛侯之弟鱣。出奔晉。〔書〕言鱣〔治〕絕骨肉之親。弃大夫之位。越先人之境。附他人之域。窮涉寒飢。織履而食。不明之効也。

思務第十二

夫長於變者。不可窮以詐。通於道者。不可驚以恠。審於辭者。不可惑以言。〔遠〕達於義者。不可動以利。是以君子。廣思而博聽。進退循法。動作合度。聞見欲衆。而采擇欲謹。學問欲博。而行己欲敦。見邪乃知其直。觀花乃知其實。目不淫炫耀之色。耳不亂阿諛之聲。是故利之以晉楚之富。而志不回。談之以喬松之壽。而行不易。然後能一其道。而定其操。依其用而建其功。凡人則不然。目放於富貴之榮。耳亂於不死之道。故多弃其所長。而求其所短。得其所亡。而失其

効なるをいうなり。

夫れ變に通ずる者には、窮^{クル}しむるに詐を以てすべからず。道に通ずる者には、驚かすに恠を以てすべからず。辭に審かなる者には、惑わすに言を以てすべからず。義に達する者には動かすに利を以てすべからず。是を以て君子は廣く思ひ博く聽き、進退法に循い、動作度に合す。聞見は衆からんことを欲し、采擇は謹まんことを欲す。學問は博からんことを欲し、己を行ふには敦からんことを欲す。邪を見ては乃ちその直を知り、花を見ては乃ちその實を知る。目は炫耀の色に淫せず。耳は阿諛の聲に亂されず。是の故に之を利するに晉楚の富を以てするも、志は回らず。之に談ずるに喬松の壽を以てするも、行いは易らず。然る後に能くその道を一にして其の操を定め、その用に依りてその功を建つ。凡人は然らず。目は富貴の榮を放^{ホシ}いままにし、耳は不死の道に亂さる。故に多くはその長とする所を

所有。是以吳王夫差。知度艾陵之可勝。而不悟
〔勾踐〕携李。將以破亡也。故昏者或見一利。而喪
萬機。求一福。而致〔萬〕百禍。夫學者通於神靈
之變化。曉於天地之開闢。知陰陽之弛張。性命
之短長。富貴之所在。貧賤之所亡。則手足不
勞。〔而〕耳目不亂。思慮不惑。計策不誤。上訣
是非於天文。〔其次〕下定狐疑於世務。興廢有所
據。轉移有所守。故道德可則。而制事可法也。
昔舜禹因盛而治世。孔子承衰而作功。聖人不空
出。賢者不虛生。乃百姓去於惡而歸於善。斯
〔乃〕仍天地之法。而制其事。則萬世之便。而設
其義。故聖人不必同道。百工不必同器。好者不
必同色而皆美。醜者不必同狀而皆惡。天地之
數。〔斯〕符命之象也。日月互明。各有所照。八
宿並列。各有所主。萬端異路。千法異形。聖人
因其勢而調之。使小大不得相侵。方圓不得相

弃てて、その短とする所を求め、その亡う所を得んとし
て、その有する所を失う。是を以て吳王夫差は、知は艾陵
の勝つべきを度りしも、携李の將に以て破亡せんとする
を悟らず。故に昏者は、或いは一利を見て萬機を喪い、或
いは一福を求めて百禍を致す。夫れ學者は神靈の變化に通
じ、天地の開闢を曉る。陰陽の弛張、性命の短長、富貴の
在る所、貧賤の亡き所を知れば、手足勞せず、耳目亂れ
ず、思慮惑わず、計策誤まらず。上は是非を天文に決し、
下は狐疑を世務に定む。興廢に據る所あり、轉移に守る所
あり。故に道德則るべくして、制事法とすべきなり。昔は
舜・禹は、盛に因りて世を治め、孔子は衰を承けて功を作
す。聖人は空しくは出でず、賢者は虚しくは生れず。乃
ち百姓、惡を去りて善に歸す。斯れ天地の法に仍りて其の
事を制し、萬世の便に則りて其の義を設くるなり。故に聖人
は必ずしも道を同じくせず、百工は必ずしも器を同じくせ
ず。好き者は必ずしも色を同じくせずして皆美しく、醜き
者は必ずしも状を同じくせずして皆惡し。天地の數、符命
の象なるなり。日月は互いに明かにして各々照す所あり。
八宿並び列して各々主どる所あり。萬端、路を異にし、千
法、形を異にす。聖人は其の勢に因りて之を調のえ、小大
をして相侵すを得ず、方圓をして相干すを得ざらしむ。之
を分つに度を以てし、之を紀すに節を以てし、星は晝見え
ず、日は夜照さず、雷は冬發せず、霜は夏降らず。臣は君

干。分之以度。紀之以節。星不晝見。日不夜照。雷不冬發。霜不夏降。臣不凌君。則陰不侵陽。盛夏不暑。隆冬不霜。黑氣苞日。彗星揚光。虹蜺冬見。蟄虫夏藏。熒惑亂宿。衆星失行。聖人因天變。而正其失。理其〔端〕異。而正其本。堯承蚩尤之失。而思欽明之道。君子見惡於外。則知變於內。桀紂不暴。則湯武不仁。〔才〕不惑於衆。見非〔者〕而改之。於是趙高李斯。雖亂之於朝廷。而匹夫治之於閨門。是〔以〕接輿老萊。所以避世於窮巷。欲去其貴而遠其尊也。君子行之於幽間。小人厲之於士衆。老子曰。上德不德。是以有德。言致虛也。夫口誦聖人之言。身學賢者之行。久而不弊。勞而不廢。雖未爲君子則亦君子而已。孔子曰。行夏之時。乘殷之輅。服周之冕。樂則韶舞。放鄭聲。遠佞人。人君遵道。而行之於世。雖非堯舜之君。則亦堯舜

を凌がず、陰は陽を侵さざるなり。盛夏に暑からず、隆冬に霜せず、黒氣日を苞み、彗星光を揚げ、虹蜺冬見われ、蟄虫夏藏れ、熒惑宿を亂し、衆星行を失すれば、聖人は天變に因りてその失を正し、その端を理めて、その本を正す。堯は蚩尤の失を承けて欽明の道を思う。君子は惡を外に見れば變を内に知るなり。桀・紂暴ならざりしならば、湯武は仁をなさざりしならん。衆に惑わされず、非を見て之を改む。是に於いて趙高李斯、之を朝廷に亂ると雖も、匹夫は之を閨門に治む。これ接輿・老萊の世を窮巷に避け、その貴を去りてその尊より遠ざからんと欲する所以なり。君子は之を幽間に行い、小人は之を士衆に厲ます。老子曰く、上徳は徳とせず、是を以て徳あり、と。言うころは虚を致すとなり。夫れ口に聖人の言を誦し、身に賢者の行いを學ぶ者は、久しくして弊あらず、勞して廢れず。未だ君子たらずと雖も則ち亦た君子なり。孔子曰く、夏の時を行い、殷の輅に乗り、周の冕を服し、樂は則ち韶舞、鄭聲を放ち、佞人を遠ざく、と。人君、道に遵って之を世に行えば、堯舜の君にあらずと雖も、則ち亦た堯舜なり。今の君たる者は然らず。治は堯舜に法らずして曰く、今の世は道德を以て治むべからざるなり、と。臣たる者は稷・契・周公の政を師とせずして曰く、今の民は仁義を以て正すべからざるなり、と。子たる者は、曾・閔の賢の朝夕休めず、節を盡して倦まざるを執るなく、曰く、家人敦からざ

也。今之爲君者則不然。治不法於堯舜。而曰。今之世不可以道德治也。爲臣者不師稷契周公之政。則曰。今之民不可以仁義正也。爲子者「不」无執曾閔之賢。朝夕不休。盡節不倦。則曰家人不敦也。學者無操回賜之精。晝夜不懈。循禮而動。則曰。世所不行也。自人君至于庶人。未有法聖人道。行賢者心。爲善者寡。爲惡者衆。易曰。豐其屋。蔀其家。闐其戸。闐其無人。言無聖賢治之耳。故仁者在位。而仁人來。義士在朝。而義士至。是以墨子之門。多勇士。仲尼之門。多道德。文武之朝。多賢良。秦王之庭。多不祥。故善者必有所因而至。惡者必有所因而來。善惡不空「出」生。禍福不妄作。唯心之所向。志之所行而已。

るなり、と。學者は回・賜の精、晝夜懈らず、禮に循って動くを操ることなく、曰く、世の行わざる所なりと。人君より庶人に至るまで、未だ聖人の道に法り、賢者の心を行う者あらず。善を爲す者は寡く、惡を爲す者は衆し。易に曰く、其の屋を豐にし、其の家を蔀す。其の戸を闐えは、闐としてそれ人なし、と。言うところは、聖賢の之を治むるものなし、となり。故に仁者位にありて仁人來り、義士朝にありて義士至る。是を以て墨子の門に勇士多く、仲尼の門に道德多し。文武の朝に賢良多く、秦王の庭に不祥多し。故に善者は必ず因る所ありて至り、惡者は必ず因る所ありて來る。善惡は空しく生ぜず、禍福は妄りに作らず。ただ心の向う所、志の行く所にあるのみ。

(註) ① 明下缺一字、今明上に一字を補う。

④ 可下缺一字、今補わず。

② 生下缺一字、今補わず。

⑤ 虫下缺三字、今二字を補う。

③ 讀下缺二字、今一字を補う。

⑥ 日下缺八字、今七字を補う。

三 新語の思想

前述のように「新語」は完本でない虞れが十分にある。もし南宋の時に七篇しか存在せず、それがそのまま伝わったのだとすれば、現今の十二篇は、その七篇を十二に割り直ただけで、もとの五篇は紛失したままになっている筈である。尤も一方には、唐晏の考えのように、王應麟は南宋に伝わった残缺本しか知らず、中原の金王朝にはなお完本が伝わっており、それが元をへて明に至り、印刷に付せられたのが現今の新語だという見方も行われている。

いま「新語」の各篇の行数を検べると、四部叢刊の覆明弘治本では、半葉十行、一行十七字であるが、

		87行
卷一	42	
卷二	32	
卷三	36	
卷四	63	
卷五	51	
卷六	52	
卷七	42	
卷八	46	
卷九	40	
卷十	41	
卷十一	53	
卷十二		

という數を得る。第五と第六とは、第六篇中の錯簡十四行を、第五篇に返した後の數である。ここで直ちに氣のつくことは、一篇の分量において、第一篇の八七行に對して、第三篇の三二行というように、大きいアンバランスの存在することである。そこで若しも短い二篇を一篇に合併したと假定すると、

卷一	87
卷二	74
卷三	87
卷四	63
卷五	
卷六	94
卷七	86
卷八	94
卷九	
卷十	
卷十一	
卷十二	

全部で七篇となり、相互間の分量のアンバランスが反って目立たなくなる。故に王應麟の言うところの七篇が、そのまま十二篇に分割されて現今の通行本となった可能性は十分に考えられてよいと思う。

既に現今の「新語」が完本でなく、約その三分の一を失ったものだとすると、新語の思想を体系つけて考えることは甚だ困難になる。併しながら、さし當っては完本の再出現も望まれぬ以上、不完全を虞りつつも、現行本に従って陸賈の思想を、能う限り系統立てて考えてみるのも無用な業でもあるまい。

「新語」を通觀して直ちに感じられることは、その思想は荀子の學說を受けたらしく、特に荀子の後王思想が濃厚に現われる點である。先ず道基篇第一においては、天が萬物を生じ、地が之を養った、その延長として聖人が現われて人間生活に文化を與えたことを論ずる。地の徳を論ずることが、抑も荀子學說の一特徴である。その聖人は前聖、中聖、後聖の三段階に分けられるが、それは一直線に引きつがれたものではなく、中間に中たるみの混乱期が挿入される。いわゆる一治一乱であり、乱世という試鍊を経たのちに、新しい聖人が現われては人類を濟度し、その度に文化が進歩するのである。もちろん、この思想は荀子に始まったものではなく、孔子が既に、夏殷周の三代を比較して、

周は二代に監む。郁郁乎として文なる哉。吾は周に従わん。（論語八佾第三）

といっている。而して陸賈の後王思想は、明かに新たに成立した漢王朝に對する期待の意味が含まれていると見ねばならぬであらう。

陸賈の説く一治一乱は、天の爲せる宿命ではなく、どこまでも人事現象であり、特に君主がこれに對して最大の責任を負わねばならぬとする。故に時に陰陽、五行を言うも、それは五行による革命循環の説ではない。そこで人君たるものの態度が、人類の運命を左右する重要な契機となってくるが、結局それは如何なる學派、學說に耳を傾けるべきかという現實の問題に絞られてくる。

「新語」第四は無爲篇と名つけられるが、陸賈の考える老子の學說は、儒家と敵對する無爲ではなく、儒家と一致する無爲、無欲であって、人君がその心を無爲におけば、必然的にその行爲は先王の道に従うことになるか考える。そしてこ

の無爲無欲に正反對に對立するものは、不老不死を欲する神仙道、專制君主の独占欲を増長する法家の説であるとする。しかもこの後二者は、現實に秦始皇帝の心を捉えた邪説であり、彼等は秦の失敗に對して責任を負わねばならぬとされても仕方なかつたであらう。

陸賈の儒學は、荀子を祖述するものであるから禮制を重んずる。學問は空理ではなくして實行であり、實行には法則が伴なう。孔子が既に言つたように、何よりも先ず、「夏の時を行い、殷の輅に乗り、周の冕を服し」て見る事が大切である。されば陸賈によると、人君が道に遵つて之を行えば、「堯舜の君に非ずと雖も、また堯舜の君」に異らないのである。

併し天下は廣く人衆は多いので、天子が政治の理想を行うには、賢者の助けを借りなければならぬ。この賢者は必ずしも在朝の特権階級の子弟ばかりでなく、野に埋れた遺賢を探し出さなければならぬ。これも亦、既に商の湯王と伊尹の先例が示すように、歴史の上で證明ずみの政策である。

「新語」成立の動機が、前述のように、新たに天下を平定した漢の高祖に對して、先王の制に従つた善政を行わせるため、儒學の徒を擧用させるにあつたとすれば、以上の内容は誠に時宜に適した進言であり、別にある方面から心配されるように、漢初にはありうべからざる時代錯誤の思想とは認められないであらう。

當時の朝廷は國初草創の時であるから、開國の元勳、その子孫が政權を壟斷し易い形勢にあつた。故に陸賈は、既に天下が平定された後であるから、創業期を脱して守成期に入つたのであり、そのために政策の大轉換を要求したかったのであらう。それは結局、武を偃せて文を興すに外ならない。彼自身が高祖に文武併用を勧めたとあるが、新語においても亦利絶ちて道著われ、武讓りて徳興る。斯れ乃ち持久の道、常行の法なり。（懷慮第九）

といっているのは正にこの理想を述べているのであつて、天下は馬上に居て治むべからず、という宣言と揆を一にするも

のである。

新王朝の成立期に當っている陸賈の思想は、たとえ現實の社会には不満を抱くとしても、一方には明るい希望を夢みており、根底においては樂觀が基調をなしており、後漢以後、六朝時代の議論に見られるような、じめじめした陰鬱な悲觀論、絶望的な隱遁主義が見られない。そこで例えば原文に、

今、上に明王聖主無く、下に貞正の諸侯無し。（慎微第六）

はこのままならば、後漢代の仲長統、王符の口調であり、しかも文意がまっすぐには下へ續かない。寧ろこの文は、無しという字を有るの意に読みかえて、全体を反對の意味に解すべきであろう。「新語」の書が抑も高祖に説を進むる目的で書かれた以上は、事實、原文にあるような發言がなされる筈はない。

陸賈の生卒年は明かでない。併し秦代に生れて、漢楚爭覇の頃には既に一家の學を成していたに違いないから、少くとも二十代になっていたであろう。するとその生年は荀子の卒年と認められる前三五年頃から餘り遠くない頃であろう。そしてその「新語」は、漢代最初の著書たる光榮を荷うものであり、彼よりも遙かに年下の賈誼は正にこの頃（高祖六年||前二〇一年）に生れたのであった。董仲舒に至っては、それよりも更に二十數歳の後輩である。そこで陸賈は、秦から漢への過渡期の思想家といたいだが、秦代には法家以外の思想は抑壓されていたから、無いに等しいといってよく、結局陸賈は、更にその前の戰國末を受けて、これを漢に傳えた過渡期の思想家であり、更にいいかえれば漢一代の思想界の開祖と稱してもいい。私はかかる意味で、陸賈「新語」の思想を、中國史上に高く評價したいと思う。

A Contribution to the Study of *Lu Chia's* *Hsin-yü* 陸賈新語

MIYAZAKI Ichisada

Lu Chia 陸賈 was a Confucian statesman who flourished at the beginning of the Han dynasty. He dedicated the work by which he is known, the *Hsin-yü*, 新語 to *Kao-tsu*, 高祖 the first Han emperor, in the hope that it would lead to the establishment of a just government based on Confucian principles. Unfortunately, the present text of the *Hsin-yü* is replete with errors and omissions which render it virtually unintelligible. Various scholars, most prominently Sung Hsiang-feng have endeavored to restore the text by comparing it with fragments and passages which have survived as quotations in other works, for example, the *Ch'ün-shu chih-yao* 群書治要, preserved in Japan since T'ang times. Nevertheless, there remain a good many omissions and corruptions. The writer, therefore, has made a thorough emendation of the text in accordance with the demands of logic and style.

Lu Chia was a successor of *Hsün-tzu* 荀子 who, during the Han, was considered the representative of orthodox Confucian thought. In particular, Lu adopted Hsün-tzu's *hou-wang* 後王 concept, that is, that "the later kings are superior to the former ones." Inevitably, therefore, he embraces a conception of history and of human society that is progressive. He regards Taoism as the friend of Confucianism but feels strong antagonism toward the Legalists 法家 and "the practitioners of the arts of immortality" 神仙家 both of whom had thrived under the Ch'in. The terms *yin-yang* 陰陽 ("positive and negative principles") and *wu-hsing* 五行 ("the five elements") do appear in the *Hsin-yü*, but they do not signify anything in the nature of fatalism or an inevitably recurring pattern. In general, his ideas were attuned to the main currents of thought of the Warring States period and they opened the door to the Confucian idealism of the Han period.